HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	明治六年
Citation	北大百年史, 史料(一), 77-139
Issue Date	1981-04-10
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/30092
Type	departmental bulletin paper
File Information	siryo1_p77-139.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

明治六年

六一　函館よりの女学校生徒差出方に付掛合

其御地女学校生徒之儀最初札幌方面より拾人函館方面より拾人都合弐拾人高北海道より為差登候様御申越ニ付先ツ以札幌より九人当管内より六人都合拾五人高人撰為差登候未五人高不足ニ付此分猶為差登候心得ニ候哉北海道ニ相応之者無之候ハヽ東京おいて右人高丈ケ入校見込も有之由ニ而否申入候様斎藤英俊帰函之節学校掛より申含越候趣も有之候所次官殿帰京之砌女学生徒為差登方之儀ハ是迄ニ而余ハ見合候様御申置之趣も有之ニ付追々入校望之者も有之候へとも先ツ差扣置候儀ニ有之右者弥以人高丈ケ為差登可然儀ニ候哉又ハ見合候方ニ而可然哉当方取計方之都合も有之候間否早便御申越有之候様致度此段及御懸合候也

第一月六日　　杉浦中判官㊞

東京上局御中

追而建築掛今泉長保長女次女入校願別紙之通願出候所当人共ハ其地居住之由ニ候間御都合次第御処分有之候様致度此段も申入候也

＊　女生上游之義ハ北地住居之者ヲ勧ンガ為ナレハ住京之児女ハ一般ノ論ニ係ル可シ㊞(黒田)㊞

〔注〕　別紙を略す。

〔道〇五七五六〕

六二　律法教師雇入取止の旨通知

法国巴里リウ、デ、ラ、ペー十二番

日本公使館鮫島君

司法省キシラ幷ニツルダ欧行之節当使ノ為めローエル一人アドホケート一人雇入之儀相頼ミ貴下幷ニ寺島森へ頼状を送リタリ今此等ノ律法教師ヲ要セス故ニ此事ヲ前ニ姓名ヲ掲タル人々ニ告ケ若シ約条シタランニハ其約書引戻ノ事ヲ取計ハレヨ

前文寺島幷ニ森氏ニ電報セラレヨ

否ヤ貴答アレ

日本東京千八百七十三年第一月九日　　黒田開拓次官

〔道〇五七二六〕

＊

六三　露国留学生市川文吉を官費留学生に採用方伺

第弐号　　魯国留学生市川文吉

右之者義彼地着已来格別勉励鉱山学追々熟達殊ニ人材之趣ニ相聞候処今や北海諸州之鉱山開採之方法等夫々御布達相成候折柄右文吉ニ者現今当使必用之者ニ付開拓使七等出仕ニ御採用開拓事業等為取調当分同国滞在被仰付候様仕度此段奉伺候也

明治六年一月九日　　開拓次官黒田清隆

正院御中

〔道一〇七〇二〕

六四　語学及び普通学教師として外国人二名雇入の儀伺

一ノ三十九号

第四号

仏朗西ワールノヲリウール

フロスヘル、フーク

亜米利加華盛頓府

アルボルトヒエーツー

北海道札幌庁下学校落成迄之処東京ニおゐて生徒教育として開拓急務之学課師員夫々御雇之儀壬申正月伺済之処差向生徒階梯之ため語学幷普通学教師書面両名幸ヒ御国地在留ニ付当一月より六月三十日迄六ヶ月間当使定額金之内ヲ以御雇入仕度此段奉伺候也

明治六年一月十九日　　開拓次官黒田清隆

正院御中

〔朱書〕
「伺之通

明治六年一月廿七日」 印（正院之印）

〔道一〇七一二〕

六五　農業現術生徒修業後の開拓従事年限に付伺〔准〕

次官㊞（黒田）　　農業係㊞（千葉）㊞（加納）

五等出仕㊞（西村）　　庶務係㊞（時任）㊞

幹事㊞（吉村）㊞（田中）　　学校掛㊞　㊞

七等出仕㊞（荒井）㊞（調所）

東京ニ於テ官費ヲ以農業現術修行被仰付置候生徒之輩成業之上北海道ニ於テ開拓ニ従事致候年限之儀者東京仮学校官費生徒之規則ニ照準シ成業之上開拓ニ従事スルコト十ヶ年ト相定兼而御達置相成候様仕度此段奉伺候以上

＊　一月廿五日

＊　㊞（黒田）㊞（西村）　　農業課

貸費生徒十ヶ年自費生徒五ヶ年此年限ハ成業ノ上必ス北海道中ニ在テ其ノ自業ヲ勤メ開拓使ノ命令ヲ背クヘカラサル事

右ハ壬申十月於札幌学校ノ仮規則相設候ヶ条中ニ有之候間此段相達候尤農ノ現術修行申付候者モ右ノ規則ニ同様タルヘキ事

但シ本人及ヒ請人ノ証書規則之通可相請取事

明治六年一月廿八日　　次官

〔注〕冒頭欄外に「一月三十一日写ヲ以農業掛へ達ス」との朱書あり。

〔道〇五七五一〕

六六　雇外国人ライマン、マンロー、アンチセルの職務の件

明治六年二月七日東京ニ於テ呈

セネラールホーレシケフロン君

一昨五日御談判致候通ライマン氏ヲ北海道地質鉱属等ノ測量方ニ任シモンルー氏ヲ其補助タラシメアンチセル氏ハ仮学校生徒ノ教授幷化学分析等ヲ専務ト可致此旨三氏へ貴下ヨリ御達有之度存候且ライマン氏彼地巡廻手続等ハ協議ノ上追テ相決可申候謹言

開拓次官黒田清隆

〔道〇五七四二〕

六七　北海道の地質調査その他に付黒田開拓次官とケプロンとの会話

明治六年三月十二日黒田次官教師ケプロン」ト会話

㊎先日来屢々商議ヲ経シ地質鉱山等ノ儀決議ノ為榎本武揚同行ノ筈ナリシニ眼病ニテ引籠ミ居リ其代人ニ北垣国道ヲ同伴セリ尤モ此書中ニ概略ヲ認メタレハ宜ク御勘考玉ワルヘシ

㋮最初ハ全道一般ノ心得ナレハ専ラ夫ノミ申述タリ然ルニ此書中ノ趣ハ別ニ好手段ヲ得タル者ト云フヘシ

㊎根室北見等ノ諸国ハ道路遠遼ニシテ駅逓等ノ設モ未タ充分ナラサレハ縦令良好ナル鉱物ヲ発見スルモ即今速ニ下手スヘキ目的モナク殊ニ札幌ハ全道ノ首府ナレハ其近傍精密ナル測量ヲ経テ培養牧畜其他諸般ノ物産ヲ開キ漸次他方ニ拡充スルハ今日ノ急務ナリ故ニ先ツ石狩胆振後志渡嶋四国ノ測量ヲ「ライマン」ニ命シ今年ノ課業トシ若シ余日アラハ他方ニ及フヘク他ノ国郡ハ別ニ官員ヲ撰ミ二手ニ分チ日高ヨリ以北ヲ一手トシ又天塩以北ヲ一手トシ東西ヨリ巡廻シ地質鉱山等其概略ヲ検査シ各所ノ地図ヲ製サシメ然後ライマン」ヲシテ再ヒ測量セシメハ必ス全ヲ得且幾多ノ日月ヲ省クニ庶幾カラン

㋮然ラハ今年ノ儀ハ此ニ決シ石狩以南ヲ「ライマン」ニ命シ精密ナル測量ヲ施サシメ間然ナキ取調ヲ為スヘキ旨ヲ奉諾セシメ其方法等ハ猶協議ヲ尽シ書面ニテ貴覧ニ供スヘシ

㊎農工等今年施行ノ順序ヲ取極メノ為明日調所広丈ト一同参上致ヘク然ルニ当今三御用地ニ在来ノ諸種苗ヲ以テ全道へ繁殖セシムルニ引足ルヘキヤ若シ不足ノモノアラハ即今ノ内ニ購入シテ十分ニ致シタキ者ナリ

㋮大略引足ヘクト思ヘリ

北海道ハ魚類ノ多キ所ナレハ従来ノ製法ヲ改メ外国ヘ輸出スル時ハ夥多ノ財本ヲ得又其業モ盛大ニ至ルヘシ米国ニテ年来此事ヲ試シニ其利益甚多シ就中鰊鮭鱒等ノ如キハ最モ利益多キ者ナリ

(愚)此等ノ事モ既ニ評決シ居レル事ナレトモ多端ノ場合ニテ何分ニモ行渉リ兼ネ今日マテ遅延セリ猶速ニ施行ノ目的ヲ定ムヘシ

(ケ)地面ノ測量ハ誰ニ命セラルヘキヤ

(愚)クラク」ヲ上京セシメ「ワツソン」ノ代ニ学校ノ教官ヲ命シ測量ハ「ワツソン」ニ任ジタキ者ナリ

(ケ)夫レハ至極宜シカルヘク学校モ当分ハ格別進歩ノ生徒モ見得サレハ「クラク」ニテ十分行届キ可申ワツソン」ハ学術慥ナル者ナレハ実地上ノ事業ヲ命セラルヽハ予ニ於テモ希望スル所ナリ且給料ノ少キ教師ヲ雇入レラルヽモ宜シカルヘシ

(愚)全道ノ人民食料等他方ノ資ヲ仰カス全ク其土産ノ物ヲ以テ生計ヲ成シ得ルノ目的ヲ立ルハ農業ヲ盛ニスルヲ第一之急務ト思ヘリ故ニ先ツ農学校ヲ興シ其方法ヲ拡充セントス然ルニ「アンチセル」ハ固ヨリ舎密家ニシテ農学現術ニ熟練ノ人ニ非レハ別ニ学術実験ヲ兼ネタル者ヲ貴下ノ撰挙ニテ雇入ンコトヲ希望ス

(ケ)書籍上ニテ講習シタル人ヲ現術ニ用ル時ハ半文銭之価ナキ者ナリ米国ニテ大統領ト為ルヘキ評判ノアリシ「ホーレシグレーリー」氏ハ農学ノ著書多キ人ナリシニ晩年ニ至リ紐育ノ近傍ニテ広大ナル地面ヲ買ヒ現術ヲ施セシニ曾テ講求スル所ト大ニ径庭シ夥多ノ財本ヲ失ヒシコトアリ又唯現術所長ヲ求レハ多クハ老農夫ノ類ニテ常ニ学問ニ乏ク相兼ネタル人物ハ得カタキ者ナリ私ノ亡父ハ大ニ農業ヲ好ミ馬ニテ乗回シ半日ヲ費ス程ノ広大ナル園圃ヲ所持セリ故ニ私ハ幼少ヨリ現術ヲ見習ヒ居リ冬間ハ農学校ニ入リ学ヒタレハ追々熟達セル事ヲ得タリ故ニ学問現術ヲ兼タル人ハ常ニ得カタキ者ナリ乍併農学校ハ夥多ノ学科ヲ要セサル者ニテ先ツ器械本草舎密算術ノ四課ニテ足レリトスル者ナレハ米国ヘ申遣シ相応ノ人物相撰ミ申スヘシ

木材輸出ノ儀ハ如何御決定相成ルヘキヤ

(愚)夫レハ既ニ決定シ「ブレキストン」ヨリ器械ヲ買置キタリ然ルニ有珠ト室蘭ノ「ベケレウダ」ト両処ノ内何レカ便利ナルヘキ乎今春実地ノ取調ヲ経然後開業ノ筈ナリ最初ノ評議ハ石狩川ノ上流ニ沿ヒ設クヘキ手筈ナリシニ上海辺ヘ輸出ノ為ニハ東海岸ニ設ルヲ便利ナルヘシトテ有珠室蘭ノ両処ト決セリ最モ有珠ナレハ後志山近傍ノ樹林ヲ伐リ湖水ヨリ川流ニ沿ヒ海岸マテ流シ出ス事ヲ得テ至極便利ナル趣ナレハ実見ノ上此処ト相決スヘクト思ヘリ

(ケ)ブレキストン」ノ器械ハ東海ニ据ヘ札幌ノ器械ヲ以テ石狩近傍ノ木材ヲ鋸割シ小樽等ヘ相廻シタラハ両様ノ便ヲ得ヘシ且「ホルト」ヲ此表ニ留メ置キテハ全ク無用ナレハ「フレキストン」ノ器械ヲ

速ニ設立シ同人ニ其取扱ヲ命セラレテハ如何ナルヘキヤ

㊎同人ハ先以テ札幌ヘ出張致サセ同所ノ器械ヲ取扱ワセ申スヘシ

㋕三週間モ前ニ心掛ヲ命セラレズハ諸事調ヒ難タカルヘシ

㊎何レ来月上旬ニ相成ルヘク明日調所一同取極メ申スヘシ

㋕此レハ今般京都ノ博覧会ヘ持越スヘキ物品ノ表記ニテ其内ニハ開拓須要ノ器械等モ有之尤モ会散ノ後売却ノ筈ナレハ若シ購入等ノ時心得ニモ相成ヘシトテ桑港在留領事ヨリ相贈レル書面ナレハ閣下御一覧下サルヘシ

〔道〇五七四二〕

六八　仮学校閉校に付金銭器械等引渡の達

今日仮学閉校ニ付而ハ事務掛之儀者金銭器械其外都而左之官員江引渡之上退校可致事

阪本大主典　真崎大主典　堀権大主典　石賀権大主典

藤島中主典　鈴木中主典　千早権少主典　堀　貞亨

加藤政敏　柳生恒政

舎監取締教官幷生徒之儀者早々退校可致事

但拝借之書籍等者返上可致事

明治六年三月十四日　黒田清隆

〔農〇一三〕

六九　海外留学生処分に付意見上申

第二十一号

海外留学生徒処分云々御下議ニ付意見左ニ上陳仕候

文部省学制及ヒ伊藤博文英博士ノ建言ヲ熟考スルニ其論スル所固ヨリ允当今後生徒ノ処置然ラサルヲ得ス惟本使発遣ノ生徒ニ至ツテハ前ニ再度陳述セシ如ク其実一技一芸ノ事ヲ習ハシムルヲ為ニシテ文学ノ生徒ト称スヘキ者ニ非ス開拓事業草創ノ際ニ当リ農工諸術実用ノ材ニ乏シキヲ以テ諸生ノ志ヲ奮ヒ身ヲ北海道ニ委セント欲スル者ヲ選ヒ其才質ヲ検シ之ヲ海外諸国ニ遣シ各其所長ニ就キ各技ヲ専習セシム固ヨリ速ニ其益ヲ収ムルノ意ニ出ルモノニシテ学課ノ正則ヲ蹈ミ全材ヲ成達セシメントニ非ス且ツ既ニ多少ノ資ヲ費ヤシ其成業期シテ俟ツ可キノ時ニ至リ復之ヲシテ正課ニ就カシメ其垂成ノ効ヲ棄テ本使材ヲ求ルニ急ナルノ意ニ反ス無益ノ挙ト謂フヘシ且其習フ所固ヨリ大小深浅ノ別アリト雖トモ其実業ニ従事スルハ正課生ノ専門科ニ進ミシ者ト相類ス夫レ専門科ノ生徒或ハ兵学ニ従事シ或ハ海軍ノ術ヲ習ヒ其学フ所既ニ実事ニ渉ル者豈ニ文部ニ於テ一ニ之ヲ管理スルヲ得ンヤ要スルニ名実両ナカラ他ノ生徒ト相異ナルヲ以テ一例同視ス可ラス然レトモ其愚鈍怠惰ニシテ一技一芸ノ事ヲモ成ス能ハサル者ハ公使及教師ノ試験保証ニヨリ之ヲ召還シ厳ニ処分ヲ加ヘ且

擅ニ自ラ科ヲ転シ師ヲ易ル等ノ弊ハ其方法ヲ立之ヲ禁戒スヘシ其管理ニ至ツテハ従前ノ如ク本使ニ於テスル障碍ナカルヘシト奉存候也

四月五日　　開拓次官　姓　名

正院御中

〔道一〇七〇二〕

七〇　露学生徒本多銀次郎外一名出京願出に付伺

東京七号

東京上局御中　　杉浦中判官㊞

当処寄留魯学生徒三名之内壱人樺太江罷越魯学修行致シ度願書差出候ニ付今回長谷部少判官方江掛合置候処本多銀次郎外一人ハ同様樺太行不相願東京表江罷出別紙願書之通充分魯学修行致シ度段願出候就而者当所学校改正之見込先便申進候通ニ而迚も当分魯学迄可行届見据無之且御用掛緒方惟孝先日老母之病気之趣ヲ以帰省願出承リ届既ニ出京ニも相成候処其実帰函も致ス間敷願之伝聞も有之魯教士アナトリー方江通学而已ニ而者進歩も無覚束右ハ当処学制確立セサルタメニ青年輩空敷光陰ヲ消シ候而者其責誠免る能わす痛心不啻候依テハ御地江差出候テ本人素願之如ク勤学可相成哉御賢考之上至急御回答有之度候也

明治六年四月十一日

〔別紙〕

〔注〕

願　書

先般緒方惟孝帰省後日々修業ニ差支居候処今ニ帰函無之其上漸ク一周日間三次魯僧アナトリイより伝習仕居候得共是も此程宗祖之祭辰ニ係リ長々休業ニ相成居候ニ付愚考仕候処当今東京ハ田中緒方ハ勿論魯国官員之外僧ニコライ幷ニ私共最前伝習仕候書記官マレンダ等も東京寄留仕候間彼是比較仕候得者当地ニ於テ一人之僧より極少時間之教授を仰候よりハ東京ニ於テ田中緒方より伝習仕候上右マレンダも有之其上若干之魯人寄留仕候間当地ニ而魯学ニ従事仕候よりハ東京ニ而従事仕候方判然相優候様奉存候間何卒東京表ニ而修業相成候様仕度此段奉願上候頓首謹言

第四月廿九日　　高木平三郎㊞

本多銀二郎㊞

庶務係御中

＊　魯学教師サルトフ御雇入相成候ニ付生徒ハ従前之通タル旨返答之事

〔注〕　願書の日付は後日のものであるが、この史料の編輯者は願書を本件の別紙としているので、それに倣った。

付　右に付回答

函二百十四号

杉浦中判官殿

西村正六位
時任　為基

函館寄留魯学生徒本多銀次郎外一人東京へ遊学致度旨願出候ニ付右願書御廻シ御掛合之趣致承知候右者今般魯学教師サルトフ御地学校へ御雇入相成候ニ付向後教育方不行届之儀無之筈仍而魯学生徒他所へ遊学之儀者御差止相成可然其旨夫々御申諭有之度此段及御答候也

明治六年六月十三日

〔道〇五七五六〕

七一　仮学校則例

開拓使仮学校則例

綱　領

学校ハ徳ヲ成シ才ヲ達スルノ地ニシテ邦政ノ本ナリ今本使学校ヲ設ケ教師ヲ海外ニ招キ生徒ヲ延キ専ラ農工鉱諸学科ヲ教ヘ益規制ヲ大ニシテ之ヲ札幌ニ移シ将ニ実地上其材ヲ育シ以テ開拓ノ盛業ヲ賛ケシメントス冀クハ此校ニ入ル〔レノ誤カ〕

職　制

校　長　校中諸官員ノ管督シ一切ノ校務ヲ判決スルヲ掌ル凡事務本使ニ稟議シテ之ヲ処分シ其常例成規アル者ハ便宜施行ス

教　授　生徒教育ノ事ヲ管シ学級ヲ定メ課程ヲ立ル等ノ事ヲ掌ル

助　教　教授ヲ助ケ生徒ヲ教導シ其勤惰ヲ検シ講堂各舎ヲ監視シ及書籍器械ノ事ヲ掌ル

級長　生徒ヲ選シテ之ニ充ツ　生徒ノ起臥体操等ノ事ヲ検察スルヲ掌ル

医　官　生徒ノ疾病ヲ診視治療スルヲ掌ル

事　務　諸公文ヲ受付シ校中一切会計営繕等ノ事ヲ掌ル

校内取締　小使ヲ督シ校中ノ洒掃及火炉燈燭等ヲ点検スルヲ掌ル

玄関詰　候人書信等ヲ通伝ス

門　候　校門ヲ看守シ出入ヲ検ス

校務定則

第一条

生徒ハ十二歳ヨリ十六歳マテノ者ヲ択ヒ身体ノ検査学業ノ試験ヲ経然ル後入校ヲ許シ之ヲ予科生徒トス満二年ノ後大試験ヲ為シ専門学課ニ就カシムル事

第二条

生徒学才ニ乏シク専門学課ニ就ク能ハサル者ハ農工現術ヲ学ハシムヘキ事

第三条

生徒成業ノ後ハ北海道ニ編籍シ五年間開拓ニ従事スヘシ且其年限中ト雖トモ官ノ都合ニ依リ之ヲ止ムルコトモアルベシ尤満期後他処ヘ寄留スルハ本人ノ願ニ任スヘシト雖トモ其籍ハ終身他ヘ移ス可カラサル事

第四条

課業時間ハ日之長短ニ因テ掲示スル事

第五条

毎歳二次ノ試業ヲ以テ等級ヲ改定シ且毎月小試験ヲ為シ一級中ノ序次ヲ交換スル事

第六条

生徒疾病アツテ治ヲ受ルトキハ医薬等一切給与スベキ事

第七条

生徒病舎ニ在リ病勢危篤ナルトキハ之ヲ校長ニ申シ其状ヲ親戚ニ報ス若シ死去スルモノハ埋葬ノ法ヲ行フ或親戚其家ニ於テスルヲ請フトキハ之ヲ許シ其資用ヲ給与スル事

第八条

毎朝夕生徒各其舎外ニ整立セシメ教員医員之ヲ検閲シ其病アル者ハ之ヲ診シ其旨ヲ校長ニ具申スベキ事

第九条

伝染病ニ罹ルモノアレハ医官速ニ校長ニ申シ之ヲ別室ニ移スベキ事

第十条

水曜日毎ニ医官各室ヲ巡検シ人ノ健康ニ害アル事アレハ之ヲ禁シ疫疾等ノ憂ヲ防クベキ事

第十一条

当直ノ教員ハ必ス生徒ト食ヲ共ニシ其生熟良否等ヲ検スベキ事

第十二条

毎夜九時三十分当直ノ教員各舎ヲ巡視シ第十時講堂及ヒ行廊ノ火燭ストーフ」等ヲ点検スベキ事

第十三条

毎朝小使ニ命シ校中ヲ洒掃シ黄昏ニハ講堂及行廊等ノ火燭ヲ点セシムベシ且ツ之ヲ滅スルハ夜ノ長短或ハ課業ノ都合ニ依リ其時限ヲ定ムル事

生徒規則

第一条

信義ヲ本トシ法則ヲ守リ学業ニ勉励シ長ヲ敬シ幼ヲ扶ケ互ニ礼譲ヲ厚フシ校長教員及ヒ級長ノ命ニ背ク可ラサル事

第二条

人若シ無礼ヲ加フル者アレハ之ヲ教員ニ訴ヘ互ニ争論喧闘ス可ラサル事

第三条

講堂出席ノ時限ニ後ル可ラサル事

第四条

正課中講堂ニ於テ許可ヲ経ス猥リニ其席ヲ離ル可ラサル事

第五条

毎朝己ノ室内ヲ掃除シ衣服器物ヲ整頓シ務テ清潔ニス可キ事

第六条

毎朝夕各其舎外ニ整立シ教員医員ノ検閲ヲ受ク可キ事

第七条

校内ニテ高声談話或ハ口笛ヲ吹ク等其他争論喧闘一切不法ノ挙動アル可ラサル事

第八条

校中書籍及ヒ器物衣類ヲ猥リニ損傷シ或ハ障壁ニ戯書ス可ラサル事

第九条

校中定リタル場所ノ外猥リニ徘徊シ或ハ課業時間ノ外講堂ニ入リ或ハ食事ノ外食堂ニ到ルヘカラサル事

第十条

私ニ小使ヲ使役スルヲ許サス若シ無拠事故アリテ書信ヲ発スル等ノ事アルトキハ是レヲ校内取締ニ可申出事

第十一条

臨時ノ事故アリ会食ノ期ニ後ルヽ事アラハ速ニ其旨ヲ教員ニ可申出事

第十二条

水曜日ハ校長及ヒ〔ママ〕堂直教員各舎ヲ巡視ス各其預ル処ノ諸品書籍衣類等ヲ列シ検査ヲ受ク可キ事

第十三条

放課ノ時間ト雖トモ猥リニ他室ニ入ル可ラス又室中二人以上ヲ招会シ或ハ酒菓ノ類ヲ入レ或ハ他室ニ宿スル等ノ事アル可ラサル事

第十四条

浴湯ハ取締ノ指揮ニ従ヒ順序ヲ混ス可ラサル事

第十五条

父母ノ看病等ハ親戚ヨリ医師ノ容体書ヲ以テ可願出父母遠国ニ在テ病アリ帰省ヲ請者ハ其管轄府県ノ添状ヲ以テ可願出事

第十六条

事故アリテ暫時退校ヲ願フ者ハ其父兄親戚又ハ引受人ヨリ日数ヲ限リ願書差出ス可キ事

第十七条

暑中歳末放課中都テ帰省ヲ許ス若シ校中ニ留ルヲ請フ者ハ其意ニ任スヘキ事

第十八条

休暇ノ日外出スルトキハ教員ニ申シ鑑札ヲ請フヘシ若シ急病等相発

帰校ノ期ニ後ル、時ハ親戚或ハ引請人ヨリ医師ノ証書ヲ添ヘ届出ツヘキ事

第十九条

近火ノ節ハ教員ノ指揮ニ従ヒ都テ整列シ避退ノ用意ヲナシ教員ノ指揮ナクシテ擅ニ挙動スヘカラサル事

第二十条

官本ヲ拝借セント欲スル者ハ其書目ヲ記シ各其受持教員ヘ可申出且三級生以下ハ課外ノ書籍拝借不相成事

第二十一条

筆墨紙等ハ月曜日朝飯後三十分時間ニ交付スヘシ各受取書ヲ以テ取締ニ可申出事

第二十二条

衣服洗濯ヲ要スルモノハ月曜日晩飯後袋ニ入レ其室ノ番号及其箇数等ヲ記シ室外ニ出シ置ヘキ事

罰目

第一　着椅ヲ禁ス

第二　椅上ニ立タシム

第三　課余習字

第四　出門ヲ禁ス

第五　室外ニ出ルヲ禁ス

第六　矍内ヲ洒掃ス

第七　庭中ヲ洒掃ス

第八　教員ヨリ教戒ス

第九　等級日記ニ記ス

第十　校長ヨリ教戒ス

第十一　罰点ヲ記ス

第十二　終リノ教戒

第十三　退校

右罰目ハ譬ヘハ門限ヲ誤リ障壁ニ戯書シ或ハ人ニ無礼スル等ノ者アルトキハ之ヲ処スルニ出門ヲ禁シ或ハ矍内ヲ洒掃スル等ノ条ヲ以テシ又課業ノ時限ニ後レ或ハ猥リニ教席ヲ去ル等ノモノアルトキハ之ヲ処スルニ椅上ニ立タシメ或ハ等級日記ニ記スル等ノ条ヲ以テスルノ類其定例一ナラスト雖トモ凡規則ニ背ムク者ハ教員商議シテ之ヲ処分シ且之ヲ校長ニ具申ス

校門規則

一　午前六時開扉之事

一　午後五時鎖扉之事

但潜リ門ハ八時鎖扉之事

大門鎖扉之後長官次官通行之節ハ片扉ヲ開クヘキ事

八時後通行ヲ請モノ有レハ其姓名及用事柄聞糺シ候上通行可

差許事

一　生徒外出之節ハ鑑札受取置帰校之節可相渡鑑札所持無之者ハ外出差許スヘカラサル事

但シ四月一日ヨリ九月三十日マテハ午後七時十月一日ヨリ三月三十一日マテハ午後六時マテ帰校不致者ハ受取置候印鑑宿直ノ教員ヘ可差出事

一　長官次官通行スヘキ人之外ハ其姓名及用事柄聞糺シ候上通行可差許事

右之条々堅ク可相守事

男子生徒入校証書雛形

今般入校被仰付候ニ付左之通御請仕候

一　校中之御規則堅ク相守リ可申事

一　御法禁ヲ犯シ候歟又ハ校中御規則ニ背キ候条之儀ニテ退校被仰付候節ハ入校中之学費毎月八円宛之割ヲ以テ速ニ上納可仕事

一　成業之後ハ北海道ニ編籍シ五ヶ年御使ニ従事可仕尤他ヘ籍ヲ移シ候儀願出申ス間敷事

一　在校又ハ従事期限中仮令大病等差起候トモ退去之儀願出申間敷事

一　無拠事故有テ退校願出候節ハ校中一切之諸費総生徒之員数ニ割合其一人分速ニ上納可仕事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

年号月日　　生徒　何誰印

請人　何誰印

願人生徒ノ父兄或親戚　何誰印

開拓次官―殿

官名　某―殿　即チ校長ナリ

入校証書添書按

別紙証書之通相違無之候条入校御許容有之度候也

年号月日　　府県知事令歟　姓名　官印

開拓長官次官歟殿

女学生徒入校証書雛形

今般入校被仰付候ニ付左之通御請仕候

一　校中之御規則堅ク相守リ可申事

一　御法禁ヲ犯シ候歟又ハ校中御規則ニ背キ候等之儀ニテ退校被仰付候節ハ入校中之学費毎月八円ツヽ之割ヲ以テ速ニ上納可仕事

一　成業之上ハ五年間御使ニ従事可仕且北海道在籍之人ニアラサレ

ハ婚姻仕ル間敷事

一　在校又ハ従事期限中仮令大病等差起候トモ退去之儀願出申間敷事

一　無拠事故有テ退校願出候節ハ校中一切之諸費惣生徒之員数ニ割合其一人分速ニ上納可仕事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

生徒　何誰印

請人　何誰印

願人（生徒父兄或ハ親戚）　何誰印

開拓次官　殿

官名　某　殿（即チ校長ナリ）

右則例之通堅ク可相守事

明治六年四月十二日　開拓次官黒田清隆

学校中

右則例之通違背不仕候依テ証印如件

校長　印

教員　印

事務　印

明治六年四月十二日

開拓次官黒田清隆殿

〔農〇〇七〕

七二　資生館生徒三名仮学校へ入校の件伺

大判官　小林中主典㊞

七等出仕

小野琢磨　十四歳ト五ケ月

上嶋　職　十八歳ト八ケ月

兵頭虎雄　十五歳ト五ケ月

今般資生館生徒学業致大試候処右之者共学業格別進歩人物も最モ優等之者ニ付御規則之通東京へ御差出相成度旨教官より別紙（注）之通申立候就而者致勘弁候処右三人之者共昨年十一月御開校已来昼夜勉励僅ニ五ケ月之間ニシテ格別学業進脩之実効相立人物モ敏才往々ハ大使之為メ屹度御用立可申殊ニ未タ弱冠未満之年輩ニも有之此上大府下へ差出シ鼓舞振作ヲ加ヘ候得者益進脩大成可致見込之もの共ニ而今般モ既ニ別格之御賞誉筋有之且学業未熟往々見込無之もの三名断然退校被仰付候際ニ付右等抜群之もの共東京へ御差出相成候得者益勧懲之典モ明ニ相立他之生徒も一際奮励成業之実効可相立奉存候間右三名御規則之通東京仮学校へ御差出相成候様仕度此段奉伺候也

四月十八日

＊　書面之趣尤ニ相聞候得共東京仮学校色々御改正之際ニも有之旁当秋試業迄見合可然事

但孰れニも次官殿御下向之上ニ猶此之書面丈可入尊覧候事　㊞(松本)㊞(安田)

〔注〕別紙を略す。

付一　右の件に関し申入

松本大判官殿
田中幹事殿

西村正六位
安田定則
時任為基

札ノ第三百卅二号

資生館生徒優等之者三名此表仮学校へ入学為致度段教官ヨリ伺出之書類定則持参之上商議ヲ遂候処当春中仮学校諸規則更正之折札幌函館ノ生徒ハ専門科ニ進級ノ者ナラテハ上京不申付事ニ決議相成居候条同館規則モ前条之通改正相成候様有之度尤モ右三名之者ハ追々進歩之景況ニ仍リ夫々御通議及ヘく候得共先以当分之内ハ其表ニテ研窮為致置様有之度此段共申進候也

六年十月九日

松本大判官殿
田中正六位殿

西村正六位
安田定則
時任為基

資生館生徒優等之者三名上京入学之儀御掛合ニ付十月九日付三百卅二号ヲ以及御回答置候処即今当地仮学校生徒之内欠員有之候間兼而御申立三名之内一名更ニ御撰挙之上出京御申付有之度此段申進候也

六年十二月二十五日

〔道〇五七五六〕

付二　資生館生徒一名仮学校に入校許可の旨通知

札ノ四百三拾三号

七三　病室内則

病室内則

第一条

病室ハ常ニ空気ヲ通シ清潔ヲ勤ムヘキ事

第二条

常食ノ外別ニ患者へ滋養食ヲ与フル歟或ハ看病人等ノ増減アルトキハ事務掛へ可届出事

第三条

保養ノ為メ散歩スル者ハ予メ其時間ヲ節シ指許スヘキ事

第四条

患者ノ父母親戚等之ヲ訪フモノアレハ医員ノ許可ヲ経面会可致事

但飲食ノ物ヲ贈ルトキハ医員ノ点検ヲ受ク可キ事

第五条　患者医員ノ許可ヲ経ス猥リニ散歩致ス間敷事
患者薬食摂生法等一切医員ノ指令ニ背クヘカラサル事

第六条　右六ヶ条堅相守ルヘキ事

明治六年四月廿三日　学校印（開拓使仮学校）　〔農〇一五〕

七四　仮学校官員録

明治六年四月改正仮学校官員録〔注〕

奏任

等級	拝命	掛	宿所	免職	本生国	士民	姓尸	氏名	年齢
七等 幹事	明治七年二月八日		麻布新網町壱丁目二十一番地之内六番		鹿児島県薩摩	士族		調所広丈	

判任

等級	拝命	掛	宿所	免職	本生国	士民	姓尸	氏名	年齢
八等 大主典	明治五年九月七年五月八日	事務掛	第二大区	七年五月九日函館へ転課	鹿児島県薩摩	士族	平朝臣	柳田友卿	明治六年四月三十六年
八等	明治五年八月廿一日	翻訳	第四大区小三ノ区小石川新諏訪町斎田繁次郎地面内借地	「六年十二月十五日出仕」免出仕	静岡県武蔵	士族	源朝臣	石橋好一	明治六年四月二十六年二ヶ月
十等 八九等	明治五年三月五日同年同月十二日同年九月二十日	数学	第四大区小一之区神田錦町三丁目三番地赤松主船頭方	八年七月十二日出仕御免	浜松県武蔵	士族	藤原朝臣	山田昌邦	明治六年二十四年十一ヶ月

御用掛	権大主典	九等	十一等	九等	大主典	九等	十等	十四等
明治五年二月廿五日	同年四月十七日	同年八月廿五日	同六年八月二日	明治六年四月廿日	明治五年十月三日	同六年八月二日	同八年七月十二日	明治四年七月二十五日
女学校掛		仏学		英学	事務掛		漢学	司典
第一大区小七区鉄砲洲本港町二十三番地		第二大区小九区三田三丁目二十番地		赤坂新町三丁目二十四番地星野清重方	仮学校御構内		第三大区小八区市ヶ谷甲良町三十三番地所寄留	当校御構内
		六年八月二十五日陸軍省へ転任		「六年十二月三日依願免出仕」			「八年六月十九日依願免出仕」	六年九月八日免出仕
宮崎県	美々津県	伊賀	長野県	武蔵	群馬県	上野	柏崎県	越後	島根県	出雲	浜松県	武蔵	鹿児島県	薩摩	山口県	周防
士族			士族		平民		士族		士族		士族		士族		士族	
源朝臣			藤原朝臣		藤原朝臣		大江朝臣				藤原朝臣		平朝臣		源朝臣	
福住三			戸沢光徳		藤井三郎		森源蔵		井川洌		保田久成		伊地知季方		野邨致知	
明治六年四月三十四年			明治六年四月二十年四ヶ月		明治六年四月二十四年八ヶ月		明治六年四月三十七年五ヶ月		明治六年四月二十三年八ヶ月		明治六年四月三十六年四ヶ月		明治六年四月二十七年十一ヶ月		明治六年四月二十六年八ヶ月	

十一等	十三等 同年七月十八日 任少主典 同年八月廿五日 中主典 六年八月二日 八年七月十二日	十三等 同年七月十八日 権中主典 同年八月廿五日 少主典 六年八月二日	十三等 同五年二月十四日	十四等 同五年七月十八日 権少主典 同年八月廿五日 六年八月二日	十五等 任使掌 同年八月二十五日	十等外一等 任十四等史生 同年八月廿五日	十等外一等 任使掌 同年九月廿日 同年七月一日 同八年七月十二日
明治五年二月二十二日	明治五年八月廿五日	明治五年二月十四日	明治四年十月廿三日	明治五年八月廿四日	明治五年三月十五日	明治五年四月十日	明治五年三月十五日
翻訳	女学校掛	土人教育掛	女学校掛	医局	習字写字	事務掛	習字写字
第三大区小九区市ヶ谷本村町父一所	第三大区小四区元飯田町壱丁目福原泰輔邸中	愛宕下町三丁目三番地毛利邸内第二大区小四区	第三大区小十五区麻布笄町三番官園御構内拝借	第二大区十五区麻布網代町十二番地主清水音吉方	第二大区小十二区麻布北日ヶ窪町七番地住居	第二大区小二区芝南佐久間町二丁目十三番地住居	第二大区小十二区麻布北日ヶ窪町七番地住居
六年十二月十五日免出仕		「八年四月二日庶務へ」	「七年十一月七日免本官」	六年三月北海道へ		七年四月二十八日死去	
東京府武蔵	浜松県武蔵	山口県周防	浜松県武蔵	静岡県武蔵	鹿児島県薩摩	浜松県武蔵	静岡県武蔵
士族	士族	士族	士族	士族	士族	士族	士族
源朝臣	源朝臣	平朝臣	源朝臣	源朝臣	越智宿禰	源朝臣	源朝臣
孝以長子 吹田鯛六	相沢晋一郎厄介 加地昌二	入沢義温	花和年邦	河野道秀	下山依徳	布川信義	坂本知
明治六年四月二十二年六ヶ月	明治六年四月四十五年四ヶ月	明治六年四月三十二年三ヶ月	明治六年四月五十一年二ヶ月	明治六年四月二十八年六ヶ月	明治六年四月二十九年四ヶ月	明治六年四月四十二年四ヶ月	明治六年四月三十九年五ヶ月

等外一等任使掌生	十五等任史生	十四等	等外一等十四等	御用掛十一等	十二等任権中主典	御用掛十二等
明治五年四月十日 同年九月二十日 七年八月十四日	明治五年九月七日 七年八月十四日	明治五年七月廿五日	明治五年七月二日 同六年八月二日 同八年七月十二日	明治五年七月十七日 六年十一月廿日 明治七年一月四日	明治六年十二月三日 同八年七月十二日	明治五年八月十五日 月給二十円 明治七年一月四日
七年十一月十七日 事務	医局	生徒	校内取締	医官	英学兼司典	事務	医官
西ノ窪巴町三拾弐番地	第二大区小三区芝浜松町三丁目二十八番地大久保従五位邸内	当校御構内	第三大区九小区四ツ谷坂町坂下芝切通元水野邸	第二大区四小区西ノ久保葺手町八番地居住	西ノ久保巴丁二十五番地碇屋鉄五郎方寓		第三大区小三区赤坂表伝馬町十三番地山西栄蔵方
八年三月千葉県へ転任	八年五月廿七日司法省へ転	「六年十一月八日願依免出仕」			七年七月九日願ニ依テ免出仕		
静岡県武蔵	足柄県伊豆	山口県長門	静岡県武蔵	佐賀県肥前	長野県信濃	鹿児島県	鹿児島県薩摩
士族	士族	士族	士族	士族	士族	士族	士族
越智宿禰	源朝臣	源朝臣	藤原朝臣	源朝臣	源朝臣	平朝臣	伴朝臣
越智一朔	岡田政勝	原田節蔵	加藤政敏	池田玄泰	田中元三郎	柳田友英	萩原杏蔵
明治六年四月二十五日 六ヶ月	明治六年四月二十六日 五ヶ月	明治六年四月十九年七ヶ月	明治六年四月二十六年四ヶ月	明治六年四月三十五年六ヶ月	明治六年十二月二十五年	明治六年十二月二年一ヶ月	明治六年四月七年二十八ヶ月

御用掛

等級	拝命	掛	宿所	免職	本貫	民士	姓尸	氏名	年齢
御用掛	明治五年七月十七日 月給六十円	医官	麻布市兵衛町一丁目六番地大村従四位邸内	「十月十被命」	長崎県士族	士族	源朝臣	尾本涼海	明治六年四月
御用掛	明治五年七月十三日 月給三十円	医官	第二大区四小区西ノ久保葺手町八番地居住		佐賀県士族	士族	源朝臣	池田玄泰「上ニ書記ス」	明治六年四月三十五年六ケ月
十等	八年七月十二日			白川県			平野候次郎		
十二等	八年六月三十日			千葉県士族			田中信邦		
十四等補十三等	明治八年三月五日 同年七月十二日	漢学	第四大区三小区小石川諏訪町三十九番地村田保三方へ同居		静岡県士族		穂積朝臣	鈴木行一	
十五等十四等	明治八年二月七日 同年七月十二日	女学校掛						石渡庄三	
十一等	明治七年四月十五日	数学兼漢学兼司典	第二大区小一ノ区新桜田町拾九番地平民梅村金吉方寄留		静岡県士族	士族	源朝臣	高倉平三郎	明治七年九月二十年
十五等	明治七年五月十九日	漢学兼数学兼司典	第二大区八小区芝新堀街三番地折橋政嘉邸借家	八年二月三日庶務課へ転	東京府下	平民	藤原朝臣	小泉俊英	明治七年五月二十年三ケ月

等外

等級	拝命	掛	宿所	免職	本貫国	士民	氏尸姓	氏名	年齢
御用掛	明治五年八月十五日月給二十円	医官	第三大区小三区赤坂表伝馬町十三番地山西栄蔵方		鹿児島県薩摩	士族	伴朝臣	荻原上ニ書記杏蔵	明治六年四月二十七日
御用掛	明治七年二月二十五日拝命月給二十五円	医官	第二大区小七区芝森元丁弐丁目二番地	八年三月廿七日司法へ転	三潴県武蔵	士族	坂上朝臣	田村俊斎	明治七年二月三十六年二ヶ月
御用掛	明治八年七月十二日月給百円							山田昌邦	
等外一等	明治五年七月二日	校内取締	第三大区九小区四ツ谷坂町坂下		静岡県武蔵	士族	藤原朝臣	加藤政敏上ニ書記ス	明治六年四月二十七年四ヶ月
等外二等一等	明治六年三月三十一日明治七年一月四日	校内取締	第三大区十一小区四ツ谷仲町壱丁目六番地		東京府武蔵	士族	源朝臣	柴田勝誠	明治六年四月二十五年十ケ月
等外二等一等	明治五年六月十日同六年十月二日	六年十月二日女教師掛	第二大区六小区西ノ久保神谷町六番地	「外事移転」	東京府武蔵	士族	源朝臣	松本清明	明治六年四月三十三年六ヶ月
等外二等一等	明治五年六月二十四日同六年十月二日	六年十月二日女教師掛	第二大区小十区三田南寺町十三番地真蔵院方ニ同居	「同上」	東京府武蔵	士族		柳生恒政	明治六年四月五十四年

等外三等	等外三等	等外三等	等外三等	四等	四等	四等	四等	四等
明治五年六月九日 明治七年一月四日	明治六年四月廿一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月廿四日					
士族 取締	士族 門候	六年十月二日 玄関詰	玄関	生徒	生徒	生徒	生徒	生徒
第六大区小一ノ区深川佐賀町二丁目高田晋三郎方	第二大区小二ノ区五番地今入町西尾作二郎方ニ寄留	第二大区小四区芝愛宕町壱丁目四番地住居仕候	第二大区三小区浜松町二丁目二十八番地従五位大久保忠良邸内					
				「十月七日出仕被免」	「同上」	「同上」		
浜松県 武蔵	島根県 出雲	長野県 武蔵	足柄県 武蔵					
士族	士族	士族	士族					
源朝臣	源朝臣	藤原朝臣						
浮洲邦高	渡辺徹雄	川口満	高橋繁之助	松平光霽	野津鎮武	長沢猪三郎	弥石柔嘉	渡辺牧太
明治六年四月三十二年二ケ月	明治六年四月三十一年九ケ月	明治六年四月三十五年六ケ月	明治六年四月四十九年七ケ月					

御雇

等級	拝命	掛	宿所	免職	生本国貫	民士族	尸姓	氏名	年齢
二等	明治五年七月二十五日	女教師掛	第二大区小四区西ノ久保巴町十三番地鈴木次郎地面之内	「六年八月十五日被免」	武蔵国静岡県	士族	源朝臣	渡辺綱紀伯父渡辺松五郎	明治六年七月四十九年
二等	明治六年十月二日	門候	第二大区六小区麻布市兵衛町壱丁目二番地曾我助尚方寓		武蔵国熊谷県置賜県羽前	士族	源朝臣	田中米三郎	明治六年十月二十四年
二等	明治五年七月廿五日	女教師掛	第三大区小拾壱区青山三ツ筋町二丁目十八番地	「六年八月十五日被免」	武蔵国東京府	士族	藤原朝臣	中川重信養父中川武之進	明治六年七月四十四年八ヶ月
二等	明治六年十月二日	門候	第二大区小二区今入町五番地西尾善助方寓		武蔵国東京府	士族	源朝臣	神尾天年	明治六年十月四十二年
二等	明治六年十月二日	和漢学教員同女学校	第五大区小九区浅草北清島町十九番地報恩寺地中龍測寺方同居	七年十月廿日被免	摂津国大坂府	士族	源朝臣	正田周吉母正田如英	明治六年四月六十五年六ヶ月
御雇	明治五年七月卅日 月給二十円 同六年八月二日 月給二十五円	和漢学教員但女学校	第二大区小四区愛宕下町三丁目壱番地林正十郎邸内荒井郁之助方同居	七年十月廿七日被免	武蔵国東京府	士族		大竹長寿厄介篠田雲鳳	明治六年四月六十年四ヶ月
御雇	明治五年 月給十五円 同五年八月二日 月給二十円	和漢学教員同女学校	第五大区小九区浅草北清島町十九番地報恩寺地中龍測寺方同居	七年十月廿日被免	摂津国大坂府	士族	源朝臣	正田周吉母正田如英	明治六年四月六十五年六ヶ月

官費私費	舎号	宿所	拝命入校	退校	本貫生国	父兄引受	氏名	年齢
官費	六舎	宿所在県	明治六年四月二十一日		長野県 武蔵	長野県貫属士族 第二大区小四区琴平町二番地真田幸民邸内寄留	士族 前田精明	明治六年四月十九年十一ヶ月

明治六年四月改正仮学校生徒表〔注〕

七五　仮学校生徒表

〔注〕　表中朱筆によるものは「　」で示した。

御雇	御雇	御雇	御雇
明治五年八月五日 月給五円 同年十一月二十四日 八円 同六年八月二日 十二円	明治六年二月十八日 月給八円 同年八月二日 月給十二円	明治七年八月十二日 月給八円	明治八年　月　日 月給十五円
	士人 教育	裁縫教員兼取締	医官
	第一大区小十二区神田龍閑町十九番地	第二大区小五区芝宮本町十八番地住平民今井鉉四郎同居	
七年八月十二日依願被免	七年十月廿七日被免	七年十月三十日被免	
大坂府 摂津	東京府 武蔵	東京府 武蔵	
士族	平民		
上田金之助母 上田卯野女	平民 水野寅蔵娘 水野小紅	平民 今井鉉四郎姉 今井美津	内村昌伯
明治六年四月二十二年二ヶ月	明治六年四月二十一年八ヶ月	明治七年八月三十九年十一ヶ月	

同	同	同	同	同	同	同
五舎	三舎	壱舎	十五舎	拾舎	八舎	九舎
宿所深谷祥吉方	宿所在県	第一大区小七ノ区京橋畳町十番地所	同	宿所在県	同	同
明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日
伊豆　木更津県	長門　山口県	青森　青森県	信濃　長野県	長門　山口県	信濃　長野県	岩代　青森県
千葉ゝゝ木更津県第五大区小二ノ区十五番地所向柳原一丁目堀江弘寄留	山口県士族第二大区小十四区西ノ久保広町望月方	青森県士族第一大区七小区京橋畳町拾番地所	長野県士族第一大区十小区木挽丁一丁目二十一番地河原驥方	山口県士族潮見清輔宿所在県	長野県士族第三大区三小区表六番町三十二番地松平忠礼邸内	静岡県貫属士族第四大区小二区今川小路三町目榎本武揚邸内
士族深谷千尋	士族飯田篤信	士族久本ゝ長沢猪三郎	士族西邨哲	士族島田純一	士族西山正吾	士族山際永吾
明治六年四月十五年十一ケ月	明治六年四月十五年六ケ月	明治六年四月十七年七ケ月	明治六年四月十六年九ケ月	明治六年四月十九年七ケ月	明治六年四月十八年七ケ月	明治六年四月十八年十ケ月
「十一」	「七」	「一」				

同	同	同	同	同	同	同
七舎	八舎	十三舎	九舎	弐舎	七舎	四舎
第三大区二小区山王永田町壱丁目	宿所在県	宿所在県	肥後盛之方	第六大区六小区本所横網町二丁目拾六番地所父山本晴治方	宿所在県	第二大区小二ノ区芝鳥森町武田屋舗ニテ荒川重平方
明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日
鹿児島県薩摩	三重県伊勢	山口県長門	東京府武蔵	小田県武蔵	飾磨県但馬	東京府武蔵
鹿児島県士族第三大区小二区山王永田町	三重県貫属開拓使出仕北海道へ御用中	山口県士族第六大区小五区本所林町二丁目六十九番地秋元正寿邸内	鹿児島県士族第二大区小八ノ区芝田町壱丁目拾三番地	小田県士族第六大区六小区本所横網町二丁目拾六番地山本晴治方	飾磨県士族第一大区十三小区浜松町一丁目三番地	東京府貫属第六大区小七区本所緑町三丁目廿一番地
士族阿多甚吾	士族佐藤秀顕	士族木之植仲	平民盛之伊藤一隆	士族泉増蔵小山本晴久	士族田辺央立路基胤	士族荒川重豊秀
明治六年四月十四年四ケ月	明治六年四月十五年六ケ月	明治六年四月十六年五ケ月	明治六年四月十四年一ケ月	明治六年四月十三年三ケ月	明治六年四月十六年六ケ月	明治六年四月十四年一ケ月
「十七」	「十」	「五」	「四」	「二十二」	「九」	「三」

拾六舎	拾三舎	拾九舎	拾二舎	拾七舎	拾一舎	十一舎
第三大区九小区四ツ谷簞笥町四十番地所	第三大区十小区八十一番地四ツ谷左門町	第二大区小七区十六番地飯倉狸穴父島正芳方	第四大区小六区下谷茅町二丁目拾三番地	宿所在県	第八大区小一区千田ヶ谷仲町壱丁目六十弐番地	宿所在県
明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月廿一日	明治六年四月二十一日
		「六年十二月九日退校申付候事」				
東京府武蔵	東京府武蔵	浜松県武蔵	神奈川県平民	長野県信濃	滋賀県武蔵	千葉ゝゝ木更津ゝゝ県駿河
浜松県士族第六大区八小区北本所若宮町百三十八番地　永清	静岡県野鳩昌艾横浜太田上新田寄留	浜松県士族大島正芳第二大区小七ノ区十六番地飯倉狸穴	神奈川県管下平民山内作左衛門第一大区五小区本町壱丁目四番地借	長野県士族柘植宗義第一大区拾五小区八丁堀板本町第一大区警視出張所構内	中田要三郎	千葉ゝゝ木更津ゝゝ県第四大区五小区二ノ小川町今川小路二丁目交野正三位同居
士族高野寛林	士族河村昌富	大島正繁	平民横山彦四郎	士族堀田連太郎	士族藤田誠一郎	士族浜島暢美
明治六年四月十三年十ヶ月	明治六年四月十一年十一ヶ月	明治六年四月十二年九ヶ月	明治六年四月十六年一ヶ月	明治六年四月十五年十一ヶ月	明治六年四月十五年四ヶ月	明治六年四月十四年五ヶ月
「二十五」	「二十九」	「三十一」	「十二」	「八」	「二」	「六」

十八舎	六舎	拾舎	拾六舎	拾七舎	拾八舎	拾二舎
第五大区六小区下谷南稲荷町拾番地唯念寺中願寿寺同寓川村久直方	宿所在県	第一大区小九区丸屋町三番地	第一大区十六小区函崎開拓使貸附所御長屋	父山村林慶方	第五大区小二区浅草北三筋町四十三番地鶴間重正邸内借宅父加藤信順方	宿所在県
明治六年四月二十一日	明治六年四月廿一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日
						十年六月静岡県下へ転籍之旨届出
静岡県武蔵	鹿児島県薩摩	東京府管下平民武蔵	静岡県武蔵	東京府武蔵	東京府平民武蔵	千葉ミヽ木更津県ミヽ駿河
静岡県士族根津勢吉第一大区小十六区霊岸島東湊町壱丁目二千四百七番地小川屋藤七方寓	鹿児島県貫属山本吉蔵第三大区二小区麹町永町二丁目	木更津県平民麻蘿典則第一大区小九区八官町七番地	静岡県士族榎本道章第十大区壱小区金杉村二百十三番地	東京府士族山村林慶第三大区小二区麹町六丁目八番地	静岡県士族福村道善第五大区小十五区下谷金杉村杉崎平民篠房二郎借地	静岡県士族古川克巳本八町堀日比谷町十三番地
静岡県士族川村久直厄介島津勇治	士族上邨行孝	平民内藤吉金	士族高林吉太郎	平民山邨俊英	平民加藤国彦	士族小野兼基
明治六年四月十三年三ケ月	明治六年四月十五年三ケ月	明治六年四月十四年二ケ月	明治六年四月十三年六ケ月	明治六年四月十一年三ケ月	明治六年四月十一年五ケ月	明治六年四月十四年四ケ月
「二十三」	「十四」	「十八」	「廿一」	「二十六」	「三十」	「十三」

十五舎	弐舎	壱舎	三舎	四舎	五舎	十九舎
第二大区小九区三田三丁目二十番地戸沢光方一所	第二大区小二区田村町一番地華族山名義路邸内栗原克忠方	時任為基方	父川邨久直方	宿所在県	宿所在県	第九大区小二区小石川簞笥町五十三番地
明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月二十一日	明治六年四月廿一日	明治六年四月二十一日	明治六年五月九日
長野県士族	開拓使管下平民	鹿児島県士族	静岡県士族	鹿児島県士族	酒田県士族	東京府貫属士族
長野県士族第二大区水八区小四十三番地大給恒邸内	山口県士族第二大区小三区芝浜松町九番地	鹿児島県士族第七大区小壱区白銀下三光町九番地	静岡県士族第五大区六小区下谷南稲荷町十番地唯念寺中願寿寺方	鹿児島県士族第二大区小一ノ区裏霞ヶ関八番地	酒田県士族第四大区五小区百二番地所湯嶋妻恋坂下三組町	東京府貫属士族第九大区小二ノ区小石川正直簞笥町六十六番地
士族戸沢鼎	平民田中薫	士族時任静一	士族川村久	士族野津鎮武	士族松平光霽	士族島田直厚
明治六年四月十一年五ケ月	明治六年四月十五年三ケ月	明治六年四月十二年九ケ月	明治六年四月十四年三ケ月	明治六年四月十五年五ケ月	明治六年四月十二年	明治六年五月十五年五ケ月
「仏」	「二十七」	「二十四」	「十六」	「十五」	「二十」	「十九」

十五舎	十九舎							
第二大区小九区三田三丁目二十一番地住居	第五大区小四区二十八番地下谷中徒士町二丁目							
明治六年四月二十一日	明治六年五月五日							
		函館学校ヘ移転ヘ						
東京府武蔵	東京府平民		鹿児島県薩摩	鹿児島県薩摩				
東京府士族山口仲英方第二大区小九区三田三丁目松平信	鹿児島県士族永田盛庸第六大区小六区本所松坂町二丁目十四番地寄留							
士族松平信英	平民松平銀二郎	小島倉太郎	士族得能新次郎	士族大山助市	服部敬二郎	士族宗像政	志水小一郎	兵頭虎雄
明治六年四月十四年五ケ月	明治六年五月十二年五ケ月	明治六年七月十四年	明治八年三月十三年八ケ月	明治八年三月十六年八ケ月		明治八年三月二十一年二ケ月		

「仏」

「二十八」

北海道地質測量生徒

「明治六年四月廿一日」	明治五年九月十五日	明治五年九月二十六日	明治五年八月二日	明治五年七月二十九日	明治五年九月一日	
	「八年六月七日退校」					
浜松県士族	豊岡県武蔵	岐阜県美濃	長野県信濃	山口県長門	新潟県越後	度会県士族志摩
		同　富田莆　九段坂上富士見丁	同　長野県村山太郎	同　鹿児島県士族簑田春堯	同　浜松県士族辰巳重倍	引請人　近藤真琴　芝新銭座
士族　高橋襄三	士族　斎藤武治	士族　坂市太郎	士族　三沢思襄	士族　賀田貞二	士族　桑田知明	士族　稲垣徹之進

「本多銀太郎　高木平民三郎　外十人五名」

佐藤勇	
小野琢磨	

長野県士族 鎮目弘毅 芝増上寺山内如蘭社寄留	士族「同上」 鎮目敬忠	明治六年十月十六年	静岡県士族 駿河台鈴木丁十六番地	士族「同上」 大川長吉 酒井正夫厄介	明治六年十月十四年二ケ月	六年十月十一日入校
長野県士族 鎮目弘毅 芝増上寺山内如蘭社寄留	士族「同上」 鎮目敬忠	明治六年十月十六年	静岡県士族 酒井張甫 駿河台鈴木丁十六番地	士族「同上」 大川長吉 酒井正夫厄介	明治六年十月十四年二ケ月	六年十月十一日入校
青森県会津	士族「同上」 日向真寿見	明治六年十月十九年四ケ月	当使八等出仕 神田錦町三丁目昌邦 大丞邸内赤松海軍			六年十月十一日入校
佐賀県佐賀	士族「同上」 西種彦	明治六年十月十七年四ケ月	工部省七等出仕 田代苗臣 麻布一本松町十四番			六年十月十一日入校
新潟県越後	士族「同上」 村井一郎	明治六年十月二十年	柳谷藤吉 表茅場町三丁目			明治六年十月十一日入校
東京府武蔵	「北海道派出」 弥石柔嘉	明治六年十月十六年五ケ月	東京府士族 竹幸英 第一大区十五小区八丁堀 亀島丁一丁目四十五番地	第一大区十五小区八丁堀亀島丁四十五番地	明治六年十月四日	明治六年十年十月十日入校
白川県肥後	「北海道派出」 赤星鼎	明治六年四月十八年四ケ月	白川県士族 武田正勝 第一大区小十三区浜丁細川従四位邸内	第二大区小十四番地石丸 愛宕下電信頭方	明治五年九月二十六日	明治五年九月十四日

			同	同	同	六年十一月二十七日校	六年十一月廿七日入校
							宿所在県
	明治七年一月		拝命	拝命	拝命	拝命明治六年十月廿一日	拝命六年十月廿一日
	開拓使士族	開拓使士族	開拓使平民下管	開拓使平民下管	開拓使平民下管	開拓使僧侶管下渡島	開拓使平民下管渡島
	東京府士族第五大区七小区下谷二丁目三番地	開拓使士族松前広胤第五大区小二区浅草小島町三番地松前従五位邸内	東京府平民第六大区六小区本所相生町三丁目一番地	開拓使平民村山折三第一大区十小区采女原二十二番地伊東盛貞方	東京府平民関岡弥助第六大区一小区深川相川町二番地	東京府士族斎藤実堯第一大区四小区神田雉子町三十三番地	東京府平民第六大区六小区本所相生町三丁目壱番地
士族河村忠三郎	士族井野熊三	士族村山徹	平民小林徳太郎	平民遊佐泰三郎	平民山田和作	僧侶堀川義治	平民丸山功
	明治七年一月十六年八ケ月	明治六年十二月十六年一ケ月	明治六年十一月十三年壱ケ月	明治六年十一月十三年十一ケ月	明治六年十一月十四年十ケ月	明治六年十一月十四年十ケ月	明治六年十一月十四年十一ケ月

			引請人一所	引請人一処		引請人同処	
同上	同上	拝命明治七年三月十日	拝命明治六年十二月二十二日	拝命明治六年十二月二日	拝命明治六年十二月廿二日	拝命明治六年十二月廿二日	
			東京府士族渡島	東京府平民武蔵	新潟県士族後	静岡県平民武蔵	
札幌加籍開拓使掌渡辺良作	札幌町加籍開拓使出仕永島光忠	白石村加藤利道	東京府士族開拓使史生栗原克忠愛宕下田村町一番地山名邸内	東京府平民河辺孝之助第一大区十四小区小網町四丁目三番地	新潟県士族開拓使九等出仕源三森宿所当校	静岡県平民開拓大主典宮田正之三田一丁目阿部邸内	士族小杉侃之丞
良作長男渡辺安吉	永島光忠厄介平民庭山恭次郎	利道二男平民加藤光弘	士族栗原克行	平民「派出」河辺雄次郎	士族「派出」伊藤廉蔵	平民宮田温	
明治七年三月十三年三ケ月	明治七年三月十四年六ケ月	明治七年三月十三年三ケ月	明治六年十二月十五年一ケ月	明治六年十二月十六年十ケ月	明治七年十二月十七年七ケ月	明治六年十二月十六年七ケ月	

明治七年四月	明治七年二月	明治七年三月二十八日拝命	同上	同上	同上	同上	明治七年三月十日拝命	同上
	「七年十一月死去」		「八年六月御免」	「同上」	「八年六月御免」		「八年六月御免」	「八年六月御免」
	開拓使士族	宮城県平民						
	東京府士族 三井和強 第六大区小八区南本所外手丁七十七番地	宮城県下平民 樋口光明	開拓使管下平民 安瀬平三郎	開拓使管下平民 斎藤惣右衛門	開拓使管下平民 高橋長敬	開拓使管下平民 高橋啓庵	開拓使管下平民 坂本平九郎	札幌町加籍平民
東海林嘉平	士族 小杉格之丞	平民光明弟 樋口財一	平三郎弟平民 安瀬清蔵	惣右衛門三男平民 斎藤吉右衛門	長敬二男平民 高橋勝蔵	啓庵孫平民 高橋十三郎	坂本平九郎長男平民 坂本育太郎	前田三郎三男平民 前田富太郎
	明治七年二月十八年五ヶ月	明治七年三月二十一年三ヶ月	明治七年十一月十五年	明治七年十一月十一年	明治七年十一月十三年二ヶ月	明治七年二月十三年二ヶ月	明治七年十一月十歳九ヶ月	明治七年十一月一年

〔注〕 表中朱筆によるものは「 」で示した。

			明治七年四月	「八年六月生徒御免」		雑賀孫八	明治七年十一月十一年八ケ月

〔農〇二〇―二〕

七六 新選生徒試験入校期間に付伺

次官
五等出仕
幹事
＊

自今新撰之生徒入校ニ付別紙[注]之通リ助教ヨリ申出候間篤ト勘考仕候処通学ニテハ性行其他モ相分兼可申候間惣テ外生徒同様ニ入校為致置六十日間ハ試検中ト極置若将来学業其他進歩之目途無之者ハ吟味之上退校申付度左候テ右日限中之諸入費者差出候ニ不及候様御治定相成度奉伺候也

但北海道ヨリ出京入校之者モ同様ニ致度候也

五月三日　調所広丈 印

＊ 伺之通

但試験中日限之義者三十日迄ト可相心事[ママ] 印（黒田）

〔注〕 別紙を欠く。

〔農〇一八〕

七七 留学生処分に付伺

第三十八号

正院御中　開拓次官黒田清隆

先般外国留学生之儀文部省見込書相添御下議ニ付本使生徒之儀ハ専ラ農工諸術研究之為差遣置候者ニテ他之生徒ト自ラ相異ナルヲ以従前之通本使ニ於テ管轄致度旨申上置候然処今般留学生処分之儀文部省幷大蔵司法工部三省ヘ御達相成本使ヘ者別段御沙汰無之ニ付本使生徒之分者勿論従前之通相心得可申尤前書申上候通生徒之中後来成業之目的無之者又ハ擅ニ転科易地等之儀ハ本使限リ規則相定各所在留公使ヘ掛合之上夫々処分仕度此段奉伺候也

〔朱書〕「明治六年五月廿九日」

〔道〇五七四一〕

七八 函館の露学生徒用書籍注文方依頼

第弐百三十四号

西郷正六位殿

時任　為基殿

杉浦中判官㊞

魯学教師サルトフ氏御雇入ニ相成当地ニ於テ魯学校相開候ニ付テハ此頃中魯学生徒追々相増殊ニ初学ノ者多分ニ有之候間初学之書籍無之而者差支有之候趣ニて同氏ヨリ別紙之通申立候右者東京横浜等ニ来舶致し居候哉難計候間篤ト其筋御取調万一無之候ハヽ魯国江注文申遣シ至急ニ取寄候様可然御取計有之度此段及御依頼候也

明治六年七月三十一日

猶以書籍代価凡見込及魯国ヘートルブルグヨリ本朝迄運賃見込共別紙之通ニ有之候為御心得此段も申進候也

〔別紙〕

書籍代価　凡積リ

一　天地球儀　一揃
　代廿五ルーブレイ

一　万国地図　一
　代廿五ルーブレイ

一　数学書　五拾部
　惣代廿五ルーブレイ

一　レイフ氏著述魯仏独英対訳字典　五部
　惣代十二ルーブレイ五十カペイク

一　スミルノフ氏著述小地理書　廿部
　惣代廿ルーブレイ

一　イワノフ氏著述文法書　五十部
　惣代廿ルーブレイ

一　幼年会話書　廿五部
　惣代七十五ルーブレイ

一　歴史大略　廿五部
　惣代十五ルーブレイ

一　童蒙日誌　但シ一ケ年分
　惣代十五ルーブレイ

一　初学篇　一百部
　惣代三ルーブレイ

一　習字書　三拾部
　惣代十五ルーブレイ

一　魯都ペトルブールグヨリ皇国マデ運送代価三十ルーブレイ

惣合計二百八拾五ルーブレイ五拾カペイク

但シ一ドルラルニ付一ルーブレイ三拾四カペイク量目ニシテ惣計弐百拾三ドルラル拾セント也

右之通リニ候也

サルトフ

訳三埜又一

付 露学生徒用書籍送付に付問合

函第五百三十四号

杉浦中判官殿

西村少判官㊞
調所 幹事㊞

昨六年七月三十一日付第二百三十四号ヲ以御申越故魯学教師サルトフ氏申立候魯学生徒用書籍類巳里府へ注文致置候処今般到達ニ付其儘御送致可取計筈然ニ右サルトフ物故後上等生徒三名ノ者出京等ノ手順ニ至候上ハ遠隔ノ場所運輸ノ手数相掛ケ候モ無益ノ事ト存候併初学用ノ書籍ニ付御都合次第御送致可取計別ニ御回答有之度此段御掛合及候也

七年七月

〔道〇五七九八〕

七九 雇教師フーク満期解約に付感謝状等進呈の件

一筆致啓上候陳者貴下雇期限明治六年二月（即チ西洋千八百七十三年二月）ヨリ本月迄六箇月満期相成候ニ付最前之条約ニ従ヒ致解約候雇中学校生徒教導方格別勉励懇切ニ御世話被下生徒進歩之益不少満足ニ存候仍テ島海気一匹聊徴志ヲ表シ候間御落手有之度候右解約之次第幷是迄之厚意ヲ謝センカ為如此御座候以上

明治六年七月

開拓使七等出仕調所広丈
開拓次官 黒田清隆

フロス、フーク貴下

〔道〇五七四二〕

八〇 ランドルフ職掌等に対する異議に関し処置の件〔注〕

八月十五日

御雇米人ランドルフ条約幷学科等ノ儀ニ付異論ヲ生シタルニヨリ処置ノ件

一号

条約書

千八百七十二年第十二月十二日

華盛頓スミソニアン学校ノ博士ヘンリーノ勧ニ依テ東京或ハ蝦夷島ノ内追テ開拓使ノ定ル所ニ在テ器械学ノ教師タル為メニウセルシー州ジエルシー府ノジョン、シ、ランドルフヲ雇入ルヽ旨ヲ余此書ヲ以テ証ス同人ハ通辨官ヲ備レハ英語ヲ以テ教授スヘシ同人給料ハ亜金五千弗ニシテ紐約ヨリ日本へ向ケ出発ノ日ヨリ始ル同使ニ於テ紐約ヨリ東京迄ノ旅費ト公用ニ依テノ旅費幷ニ東京ヨリ紐

約迄帰程ノ旅費トハ之レヲ払フベシ
ランドルフ氏雇期限ハ紐約出立ノ日ヨリ三ケ年トス但シ双方六ケ月前ニ其意ヲ演述シ期限中破談スルヲ得ヘシ同人ニ一名ノ助役ヲ添ヘ日本滞留中住ノタメ家屋一箇ヲ備フベシ給料ノ内トシテ一ケ月分給料正金四百十六弗六拾八銭余ヨリ之ヲ渡シタリ又紐約ヨリ東京迄ノ旅費トシテ正金四百五拾弗余ヨリ之ヲ渡シタリ
委細ノ約束ハ日本到着ノ日開拓使ノ長ト議定スヘシ
ランドル氏ハ今日ヨリ六周間ニ出帆スヘシ

在亜米利加合衆国日本皇帝陛下ノ代理公使　森有礼

二号

条約草稿

明治六年　月　日日本政府ニ代リ開拓七等出仕調所広丈君ト亜米利加合衆国ノ公民「ジョン、ランドルフ」君ト取結ヘル条約左ノ如シ

「ランドルフ」氏ハ左ノ条々ヲ行フ可キヲ同意シ之レヲ約諾ス

第一条

明治六年一月三十日即チ西洋一千八百七十三年一月三十日ヨリ三ケ年即チ三十六ケ月器械学弁ニ開拓使ノ求メニ応シ其他学術ノ教師トシテ開拓使ニ奉職シ皇国日本中命セラレ或ハ請ハル、場所ニ在テ其諸業ニ従事勉強シ其職ヲ尽シ期限中不絶日本政府ニ仕ヘ開拓使ノ官員及ヒ教師頭取「ゼネラル、ホーレシ、ケプロン」ヨリ達スル諸命令ヲ遵奉致ス可キ事

第二条

約定期限中ハ公然或ハ隠然一切商売筋ニ関係致間敷事

第三条

日曜日及ヒ追テ日本官員ヨリ達ル別段休日ノ外ハ官員ヨリ許可ヲ得スシテ其職務ヲ廃シ申間敷事

調所氏ハ左ノ条々ヲ同意約諾ス

第一条

前文ニ掲示セル「ランドルフ」氏職務ノ為メ一ケ年給料亜金五千弗ト定メ月割ヲ以テ毎月廿五日ニ相渡候事

但シ日本金貨或ハ紙幣ヲ渡ストキハ亜金ヲ元ニ立テ相渡候事

第二条

満期雇ヲ止ル節ハ東京ヨリ亜米利加合衆国ヘ帰程ノ旅費トシテ日本金貨四百五拾円可相渡若シ北海道滞在中満期相成候節ハ其場所ヨリ東京或ハ横浜迄ノ旅費別段可相渡事

但シ双方トモ六ケ月前ニ其意ヲ報スル時ハ期限中此約書ヲ廃止スルヲ得ヘシ若シ調所氏ヨリ如此シテ満期前約書ヲ廃止候節ハ帰路旅費四百五拾円相渡シ可申「ランドルフ」氏ヨリ廃約ノ節

ハ相渡候事〔ママ〕

第三条

此約定期限中ハ「ランドルフ」氏ノ為メ住家一箇ヲ備ヘ破損ノ節ハ其修理ヲ加フヘシ然レトモ其家具自用品等ハ「ランドルフ」氏自費ヲ以テ可相辨事

第四条

ランドルフ」氏開拓使官員ノ命ニ依リ一処ヨリ他所ヘ旅行ノ節ハ其要用ナル旅費ハ相払可申事

若シ「ランドルフ」氏連綿九十日間此約書ニ載タル職務ヲ行フ能ハサル節ハ此約書ヲ廃シ約書廃止ノ日迄ノ給料而已相渡可申但シ合衆国ヘ帰程ノ旅費相渡幷ニ要用ノ手当可致事

若シ又「ランドルフ」氏万一死去致候節ハ同人後嗣或ハ引請人ヘ埋葬料トシテ四百五拾円相渡可申事

又「ランドルフ」氏其職務ヲ怠ル歟或ハ開拓使ノ官員ヨリ達スル書付ノ命令ヲ違背スル歟又ハ政府ニ不満足ノ事ヲ引起ストキハ直ニ其職ヲ免シ免職ノ日迄ノ給料而已相渡帰程ノ旅費ハ不相渡候事

右ノ条々之ヲ証スル為双方此書ニ手記調印セリ

三号

ラントルフヨリケフロンヘノ書翰

千八百七十三年第五月廿二日開拓使

セネラル、ケフロン君

検査ノ為メ御遣シ相成候約書ノ義ニ付謹テ左件ヲ申上度候

一　私儀ハ既ニ千八百七十二年第十二月十二日華盛頓ニ於テ開拓使ノ代人タル森氏ヲ以テ同使ト取結候約書所持罷在候

二　私義ハ右千八百七十二年第十二月十二日閣龍比亜州華盛頓ニ於テ取結候約書ヲ以テ全ク満足罷在候

三　私於テハ開拓使トノ確定且ツ満足ナル約書ヲ調所広丈君トノ非難スヘキ且ツ不定ナル約書ト交換致候ニ於テ少シモ私方ニ利益有之間敷存候〇御遣シノ約書ハ此等幷ニ其他ノ訳ヲ以テ尽ク不満足ニ有之候

前段情実開拓使殊ニ調所広丈君ヘ御申通被下候様相願候謹言

ジョン、シー、ラントルフ

千八百七十三年第五月廿二日

謹テ調所広丈君ニ呈ス

開拓使教師兼顧問　ホーレシ、ケフロン

四号

ラントルフ建言

ホリテクニツキ学校御取建ノ事

㋑右学校ハ開拓使ヨリ文部省管下ニ置候方可然事

㋺方今開成学校高級ノ者右学校ニ相応可仕事

(ハ)文部省ト約束ヲ立テ毎年及第生幾許人ヲ開拓使ニ附与可致事
(ニ)右学校ハ「アンチセル」幷ニ「ラントルフ」ヘ御委任ノ事
(ホ)右両人ハ小期限ノ約定トナシ置双方協議ノ上再約定取結可申事
　但シ約定期限中ハ学校ヲ総括シ他ヨリ立碍リ申間敷事
(ヘ)右両人教官ヲ人撰シ政府ニ代テ約書ヲ結ヒ彼等ヲ指図シ学校ノ為ト思フ時ハ其職ヲ免スヘキ事
(ト)学校事務裁断向両人同意ノ事ハ之ヲ施行スルノ全権可有之事若シ不同意ノ義ハ日本諸省ヨリ派出スル議官ノ決断ニ任スヘキ事
第二
(イ)右両人此学校八ケ年ノ末ニハ成就シ八ケ年目ヨリ毎年若キ「インセニール」等ヲ仕立差出スヘキヲ同意ス
(ロ)開拓使ニオヰテ此等ノ手段ヲ施ストキハ道路ヲ開キ運河ヲ掘リ其他蝦夷島須要ノ工業ヲ為ス少年幾何ヲ得ベシ
(ハ)以テ鉱山ヲ開採スルヲ得ヘシ
(ニ)以テ溶炉ヲ築造シ鉱属ヲ溶解シ金類ヲ造ルヲ得ヘシ
(ホ)製鉄場及ヒ板金ヲ造ル車ヲ取建ルヲ得ヘシ
(ヘ)蝦夷島ニ於テ器械ヲ製造スルヲ得ヘシ
(ト)漁業増加シ油ヲ搾リ各国ニ輸出スルヲ得ヘシ
(チ)此等生産ノ諸業以テ日本及ヒ亜国ヨリ移民ヲ招キ寄スルニ至ルヘシ

附言

開拓使ニ建言スル此等ノ目的ヲ施シ行フニ於テ「アンチセル」幷ニ「ラントルフ」ニ下問ノ事アラハ楽ンテ之ヲ答ヘシ「ゼネラルケプロン、アンチセル、ラントルフ」トモ何時ヲ論セス会議ノ席ニ同人等ノ論説ヲ呈スヘシ

ランドルフ

五号

生徒取扱ノ儀ニ付ランドルフヨリ申立

器械学等九人ノ者ヘ伝習可仕旨被仰御答申上候私義要用ノ事件ニ付黒田次官及ヒ其他ノ御方ヘモ建言仕候間其御答有之迄相待申度候

尚又一級ニ致シ伝習候上ハ九人ニテモ廿人ニテモ一様ニ有之且ツ後ニ至リ相増シ候義ハ甚以不利益ト被存候謹言

六号

同上

千八百七十三年五月二十二日謹テ黒田次官ヘ申上候学校ニテ上等ノ生徒試検仕候処左ノ如ニ出来仕候九人ノ内三人ハ調所氏ヨリ許可ヲ受ケ舎密ヲ学ヒ候趣ニテ六人試検仕候

月曜日ノ朝午前九時試検相始メ候所次ノ者出席致候則野村西山前田原田島田山際算術ノ内ニテ此級ニ適ス可キ容易ナル問題廿六四時間ニ書トリニテ答ヘ可キ旨出セリ

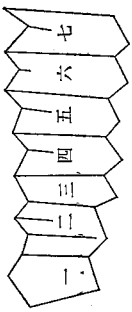
西山壱人二十一題ヲ答ヘリ島田及ヒ山際各十二題ヲ答ヘリ前田十

五題野村十一題原田四題

此書状ニ添テ右ノ問題差上候得共皆容易ニテ米利堅十歳ノ童ニ答ラレ申スヘク候

ラントルフ氏考候ニ生徒五人ノ者算術ニテ不十分ノ力ヲ顕シ候事ト此試検ヲ心得候西山壱人ハ算術ニテハ十分ノ試検ヲ受候火曜日ノ朝点竄ヲ学ヒシ歟ヲ尋候処一人乗算マテ学ヒシ趣ヲ答ヘリ幾何学三角術ヲ学ヒシモノ一人モ無之ニ付勿論其他ノ試検出来不申候

ラントルフ氏断然申上候ニ学問ハ数段ヨリ組立ル階ノ如キモノニテ算術ハ其初段ナリ器械学或ハ器械術ハ六七段ノ処ニ位シ候



今日在校ノ生徒ハ初段ノ者故適宜ノ師ヨリ助ラレ段ヲ登ルコト肝用ニ候三年モ困苦致シ登リ候上初テ六段ニ達シ器械学ヲモ学ヒ可申候謹言

七号

黒田開拓次官ヨリラントルフヘ書翰

今度学校ニ於テ貴下上等ノ生徒試験ノ儀ニ付御書面ノ趣致承知候然ハ学問ハ数段ヨリ組立ル階ノ如キモノニテ算術ハ其初段ナリ然ルニ今日在校ノ生徒ハ初段ノ者ナレハ段ヲ登リ六段ニ達シ初テ器械学ヲ為シ得ヘキ旨委細貴意ヲ領承セリ就テハ右ノ生徒ヲシテ貴下ノ師授ヲ受ケシメ其上段ニ達スヘキ教ヲ施シ度此段御達申候以上

八号

ジョン、シ、ランドルフヨリ書翰

千八百七十三年第六月三日於開拓使

学士ランドルフ黒田公ノ書簡ヲ落手シ開拓使ニ於テ其約定セル所ニ於テ大ナル誤解ヲ生タルヲ歎息ス黒田公ヨリ亜国ニ於テ碩学大博士ノ媒介ヲ以テ器械術ノ学士ヲ撰挙スヘキノ特命アリ而テ華頓スミソニアン学校ノ学士ヘンリー及ヒ其他ノ勧ニ従テ「ランドルフ氏此撰ニ預レリ然リ而テ其約書ハ開拓使ノ特令ニ依テ森氏之ヲ取結フトイヘトモ開拓使ニ於テ其約書面ニ至当ナルノ為スヘキ業ヲ与ヘス最初ハ何事ニテモ為サシメントシ次ニ尋常一般ノ学校師匠（スクールマスタル）ノ如ク取扱ハントセリ（学士ト師匠（フロフェスソル）トハ英語ニ於テ雲泥ノ相違也）而テ黒田君器械術学士撰挙ノ節英語ヲ用ヒタリ）而テ今開拓使ニ於テ右学士カ（ランドル）ヲ云フ同意セサル事ヲ同人ノ為スヲ好マサルニ驚愕ス右学士ノ為スヘシト同意セル事ハ為セヨト命セラル、事ト

全ク相違セリ黒田公ニ於テハ俸金ト蝦夷開拓使ニ於テノ位トヲ以テ天授ノ位自重及ヒ自己ノ術ヲ弘ルノ念トヲ損亡スルニ足ル者トスルカ若シ約書ニ載ル至当ノ業ニ代テ賤職ノ命ヲ奉ル時ハ天位自重弘術ノ念尽ク之レヲ亡フ也黒田君ノ書簡ニ載ル所ノ示令ハ全ク条約外ノ事也ランドルフ氏ハ器械ノ術ヲ授カルヘキ生徒ヲ教授スル為ニ当地ニ招カレタル者ニシテ生徒ヲ導テ其課ニ登ラシメ而テ其術ヲ伝ルノ為メニ非ス若シ右ノ如キ約ト為スニ於テハ黒田公ノランドルフ氏ニ日本ノ子供ヲ附属セシメ開拓使学校ニ入学スルニ須要ナル学問ノ上級ニ達ル様教授スルヲ命スルモ可ナラン」結尾ニ於テ「ランドルフ学士左件ヲ述フ黒田君ハ約書ニ載ルノ事而已ヲ命シ得ヘシト信スルヲ以テ方今ノ令ヲ奉スルヲ肯セス若シ開拓使ニ於テ約書ニ載ル手続ヲ以テ破約ヲ欲ルニ於テハ「ランドルフ氏不快ヲ抱ク事アルヘカラス謹白

黒田開拓次官ヨリ上野外務少輔ヘ懸合

当使御雇教師米国人シヨン、シー、ラントロフ参著以来条約幷学科等ノ儀ニ付異論ノ筋有之再三説諭ヲ加ヘ委詳事情相達候テモ何分承引無之不得止場合右条約相罷不申テハ不叶儀ニ相至候処右雇入ノ始末ハ昨春中器械学教師御雇伺済ノ上右取計方少辨務使森有礼ヘ依頼申遣置其後本使詮議ノ筋有之器械学取建即今差扣候ニ付教師雇入ノ手配相止呉候様電信ヲ以テ申遣候処右到著前ラントロフ雇入ノ条約相済居候趣ヲ以其儘差越候ニ付森氏ノ条約面（別紙写第一号）ニ従ヒ委細約束相結可申草稿（別紙写第二号）ヲ以「ラントロフヘ内達致候然ルニ右条約不満足ノ趣書面（別紙写第三号）ニテ申聞候全ク森氏条約書中委細ノ約束ハ日本到著ノ日開拓使ノ長ト議定云々ノ旨意ニ悖リ不都合ノ儀ニ候且ツ諸術学校取設ノ儀建言（別紙写第四号）有之種々商議ヲ尽候処当使歳額中諸興作ノ経費概算議定ノ上既ニ有余無之即今著手ノ目的相立兼候訳ヲ以テ当分在校生徒ノ内教授致候様相達候得ハ未熟ノ生徒取扱兼候趣苦情申立（別紙写第五六号）不都合（ママ）ノ儀トハ存候得共何分丁寧ニ可取計見込ヲ以テ又々相達候（別紙第七号）然ルニ最前申立候趣ノミ主張致シ（別紙写第八号）此ヨリ相達候情状ハ更ニ酘酌不致乍去本使中諸業学校等取立可申時機ニ無之到底採用難相成儀ニ付文工両省ニテ器械学取立ノ儀モ候ハヽ御雇替ノ上ラントロフ建言ノ趣施行相成候様致度再応掛合及候得共両省共即今御更正中此義ニ及兼候趣是亦不得止儀ニ候尤モ学科等ノミナラス条約上ニ不都合ヲ生候上ハ別ニ取扱方モ無之右御雇入相罷候都合ノ処右雇入ノ始末別紙ノ通ニ候条公法上ニ照準差支有無御回答有之度別紙写横文等十六通相添此段及御掛合候也　六月十四日

（朱書）
「回答欠」

×　×　×

西村正六位外一名ヨリ黒田開拓次官ヘ書翰

ラントルフ雇廃止ノ儀ニ付テハ兼テ御指図ノ次第モ有之調所広丈ヨ

リ外務少輔幷御雇顧問スミツヘ種々及相談候処森氏条約書ニ基キ思慮ヲ重ネ候ヘトモ即今雇ヲ免シ候手続ニ至リ兼候ニ付何日ヨリニテモ六ケ月満期ニシテ雇被相止候外良策無之トノ趣ニ有之猶西村貞陽ヨリ工部大輔ヘモ懇談致シ候ヘトモ同省ニ於テモ差向入用無之不得止七月三日ヨリ六ケ月満期ニシテ雇廃止候旨別紙ノ通示令草稿スミツヘ相頼石橋外務少丞等ヘモ相談シ「ラントルフ」ヘ相達候処則請書差越候右月間中ハ条約面ニ基キ都テ器械ニ関スルモノ等ヲ為取扱候積ニ御坐候依テ為御検閲書類御廻シ申候間御承知被下度猶委細ノ義ハ御帰京ノ上口述可仕此段申進候也

別紙

西村正六位ヨリランドルフヘ往

千八百七十二年第十二月十二日ノ約書ヲ以テ御雇申候処本日ヨリ六ケ月満期ニ於テ貴下ノ雇相止候間此段御報知及候也　七月三日

ランドルフヨリ回答

千八百七十三年第七月四日東京開拓使呈

黒田公代理正六位西村貞陽君

本月三日附ノ貴簡拝受開拓使於テ千八百七十三年第七月三日ヨリ六ケ月ノ終リニ於テ約書御廃止可被成旨被仰越了承如此キ手段ニ立至リ候ハ最モ歎息ノ次第ニ候ヘトモ誤解ヲ結局致候ニハ適宜ノ御所置ト奉存候以上

×　×　×

黒田開拓次官ヨリランドルフヘノ書翰

貴下職務ノ儀ニ付今般森有礼ヨリ書面ノ趣モ有之候ニ付器械工業ノ術ヲ以テ実地有用ノ職人ヲ教授被致候様有之度尤モ右ニ付有礼ノ書翰写相添此段申入候也　八月日欠

朱書　此書ハ森氏ヘ相談相成候処同人見込ノ廉有之認直シ被相達此分取消ノ旨調所殿ヨリ承ル

別紙

森有礼ヨリ来書ノ抜書

ラントルフ氏一条ハ同人昨夜面会談判先ツ器械工業ノ術ヲ以テ実地用立職人ヲ教込ム丈ノ処ニ勉強セシムル都合ニ致シ置候尤文字ハ全我国ノモノノミ西洋書籍等ハ受教人ヘ附セザル積リ右ノ手筈ニテ次官ヨリ同人ヘ被達度事

森有礼ヨリ黒田開拓次官ヘ書翰

御紙面ノ趣恭承仕候器械（器械）工業（工業）ノ文字ハメカニカル（凡器械）シウイル（エンヂニヤリング）ヲ意味スル積ニテ相記置候ランドロフ氏ヘ御遣可相成書面上ニ付キ聊気付ノ廉有之仍テ別紙横文更ニ賢覧ニ供度翻訳ノ余暇無之其儘進呈委細ハ拝眉ノ時縷々可申上候也

×　×　×

黒田開拓次官ヨリランドルフヘ書翰

貴下当使へ勤務ノ儀ニ付森有礼氏ヨリ見込ノ趣承知致シ候右ハ貴下へ御判ノ上申越シ候儀ト被存候右有礼氏見込ノ趣ハ貴下受教人数輩ヲ引受器械工業両様ノ内実地ニ可相施術業ヲ教授シ以テ方今実地ニ於テ相働居候職人ヲ指図致候様ノ人物ニ取立可申義ニ有之尤右受教人ニ教授致候ニハ外国書籍不相用通辨者ヲ以テ其学フ処ノ何事ナルヲ委敷生徒ニ了解為致候様教諭可致義ニ有之候間右目的相達候様御教諭ノ好手段御取設ケ有之度候此段及御依頼也　月日欠

〔注〕本史料は、編集された写本より採録した。本史料の日付は「八月十五日」と記載されているが、これは本件が決着した最後のランドルフ宛書翰と関連するものと思われる。

〔道〇五五一五〕

八一　開拓使派遣留学生徒管轄に付伺

第七拾三号

当使差遣留学生徒之儀ニ付伺

当使差遣留学生徒処分之儀ニ付本年第三十八号ヲ以テ奉伺候処未タ何分之御沙汰無之然ルニ今般陸海軍生徒ヲ除ク之外各省使差遣之留学生徒ハ自今都テ文部省ニ於テ管理処分致シ候旨院省使へ御達相成候処当使生徒之儀ハ毎々申上候通他ノ生徒ト違ヒ学科之次第別紙之通ニ有之普通之規則ヲ以処分難致候儀ニ付従前之通当使ニ於テ管轄致度尤御許容之上ハ右課程ニ依リ各検査致シ帰留取調可申上候条此段奉伺候也

明治六年八月廿四日　開拓次官黒田清隆

太政大臣代理

参議後藤象二郎殿

参議江藤新平殿

〔別紙〕

当使差遣海外留学生徒人員

魯国留学生徒

鉱山　二木　彦七

右ハ専ラ本科ヲ研究シ現術ヲ攻習シ他ノ科業ヲ以テ本科ノ進歩ヲ妨クルヲ許サス

農学　宮地堅一郎

〔朱書〕「同上」

同　江村　次郎

右二名ハ専ラ本科現術ノミヲ勉励シ必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス

仏国留学生徒

鉱山　榎本彦太郎

農学　山口彦次郎

工学　長谷部仲彦

右三名ハ専ラ本科現術ノミヲ勉励シ必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス

米国留学生徒

工学　山川健次郎
鉱山　服部敬次郎
農学　中島政之允

右三名ハ専ラ本科ヲ研究シ現術ヲ攻習シ他ノ科業ヲ以テ本科ノ進歩ヲ妨クルヲ許サス

鉱山　大和七之允
同　志道新之允
同　大山　助市
同　村田　十蔵
同　鮫島武之助
農学　税所　長八
同　市来　宗助
同　西郷菊次郎
同　柴山　弥八
農学　得能新次郎
同　工藤精一郎

右十一名ハ専ラ本科現術ノミヲ勉励シ必シモ読書上ノ工夫ヲ要セス

〔朱書〕「同上」

鉱山　来原彦太郎
農学　種子田清一
同　最上　五郎
同　山尾常次郎

右四名ハ専ラ本科ヲ研究シ現術ヲ攻習シ他ノ科業ヲ以テ本科ノ進歩ヲ妨クルヲ許サス

〔朱書〕「米国留学女生徒」

永井　繁
山川　捨松
津田　梅

右三名ハ専ラ女学科ヲ勉励スヘシ

〔道一〇七〇三〕

八二　開拓使派遣留学生徒名目廃止に付伺

第七拾六号

当使差遣留学生徒名目廃止ノ儀ニ付伺

当使差遣留学生徒ノ儀ニ付本年八月二十四日相伺置候処未タ何分ノ御沙汰無之然ルニ右生徒ノ儀ハ昨秋以来数回稟議ノ通農工鉱山等ノ

現術技業ヲ専習セシメ固ヨリ学課ノ正則ヲ践ミ全材ヲ成達セシムル者ニ無之其実農夫工人同一ニ有之右技術卒業ノ遅速ハ拓土開物ノ成否ニ関係致シ尋常普通ノ規則ヲ以テ拘束致候テハ不都合ニ付是迄ノ通従事為致申度候処生徒ノ名目ニテハ御規則ニ障碍モ可有之ニ付右名目相廃シ当使御用技術質問トシテ其儘在留申付候様仕度候条至急御許容相成度此段奉伺候也

明治六年九月三日　　開拓次官黒田清隆

太政大臣三条実美殿

八三　電信生徒証書案（九月一三日）

〔道一〇七〇三〕

証書案

今般開拓使官費ヲ以電信生徒被仰付候ニ付左之通御請仕候　*

一　御使之命令堅ク相守可申事

一　御法禁ヲ犯シ候歟又ハ電信寮御規則ニ背キ候等ノ儀ニテ退校被仰付候節ハ学費毎月八円宛ノ割ヲ以テ本人或ハ請人ヨリ速ニ上納**可仕事

一　成業ノ後ハ㊞(調所)北海道ニ偏籍シ五ヶ年御使ニ従事可仕尤他ヘ籍ヲ移シ候儀願出申間敷事

一　修行又ハ従事期限中仮令大病等差起候歟或ハ何様ノ事故有之候共退去ノ儀願出申間敷事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

何県貫属士民歟
誰何子或ハ厄介歟　当人　何之誰　印

明治何年何月
何十年何ケ月

何県貫属士民歟　請人　何之誰　印

開拓次官黒田清隆殿

奥書

前書之通相違無之候事

年号月日　　府県　印

＊　証書ハ電信寮ニテ四週間学業勤惰人質等ニ至ルマテ試験之上官費生徒申付候節当校ニ於テ請取候事　㊞(調所)　㊞

＊＊　以下ノ書類函館ヘ相回候テハ葛藤ヲ生シ可申候条御回無之様仕度候事　㊞(鈴木)

〔道〇五七五七〕

八四　学校取建に対するケプロンの意見〔注〕

第十二号

千八百七十三年第九月廿二日東京曇

開拓次官黒田清隆閣下

第六月九日十三日十五日及ヒ第七月十五日附数通の貴答として賜りたる第八月六日御認之貴簡落掌せり

〔中略〕

次ニ余か申述せる所を閣下想錯せられしと思ふヶ条ハ教育之儀也余か第七月十五日の書面ニ申述せる所ハ高上なる学術を教授する学校取建の儀尓て之レ尓は大金ヲ以て有名の博士等を要す云々と記せる而已尓て普通学又ハ予備学校の事尓ハ非す各国の学語を学ふ等の儀ハ願はしきことなれは教授すへき也

開拓使の官員より大学小学の義ニ付余ヵ愚案を乞れたるは去歳七月三十日杉浦誠松平太郎両氏より七重ニ大学校取建の義ニ付掛合れたる書状のみ其書面ニ千八百七十二年第九月十七日附を以て大学校は未タ可ならす小学校こそ可然と回答せり

余八月十七日附の貴簡ニ就き二ヶ条を前文ニ演述せるは特ニ開拓使庁の公文中ニ余か云ふ所の誤りなき越残さん為のみ　拝具謹言

開拓使教師兼顧問ホーレシ、ケプロン

〔注〕本件の全文は『開拓使顧問ホラシ・ケプロン報文』を参照されたい。

〔道〇五七四二〕

八五　女学校生徒表

明治六年九月女学生徒表〔注〕

官費	舎号	宿所	拝命入校	退校	本生国貫	父兄引請	氏名	年齢
同	第壱	第一大区小七ノ区 桶町壱丁目	同		鳥取県	開拓使出仕 千葉一胤	千葉震女	明治六年九月 十六年六ヶ月
		第五大区小十三区 下谷青石横町	壬申八月十八日 同九月十九日		東京府 武蔵	東京府権少属 河野惣十郎	河野悦女	明治六年九月 十六年四ヶ月

同	第二舎	第四大区小一ノ区 神田錦町三丁目 赤松海軍大丞方	同	浜松県 武蔵	開拓使出仕 伯父 山田昌邦	向坂鉄女	明治六年九月 十四年八ヶ月
同	同	第三大区小十一区 四ツ谷東仲町三丁目	同	東京府 武蔵	士族 小林道彰	小林鋭女	
			「六年五月九日 退校」				
同	同	第四大区小四ノ区 湯島六丁目	同	東京府 武蔵	平民 斎藤万松	斎藤琴女	明治六年九月 十六年四ヶ月
同	同	箱館詰	壬申十月九日		開拓使出仕 斎藤英俊	神尾栄女	明治六年九月 十五年四ヶ月
同	第四舎	第二大区小五ノ区 芝山内山下谷 潅崇院	壬申八月十八日 同九月十九日	豊後県 但馬	開拓使出仕 金井信之	金井倉女	明治六年九月 十二年九ヶ月
同	同	第二大区小二ノ区 愛宕下田村町 林正十郎邸内	壬申八月十八日 同九月十九日	静岡県 武蔵	開拓使出仕 大鳥圭介	大鳥雪女	明治六年九月 十一年
同	同	同	同 同	同県 同	右同人	大鳥品女	明治六年九月 十二年八ヶ月
第二大区小七区 麻布狸穴			壬申十月一日 同	鹿児島県 肥後	開拓使出仕 調所広丈	田母神喜曾女	明治六年九月 十一年五ヶ月
			壬申八月十八日 同九月十九日	静岡県 佐渡	当使出仕 山田守畯	山田皆女	明治六年九月 十二年

第三大区小十四区 赤阪田丁六丁目	同 同	東京府 武蔵	軍医寮出仕 水谷寛得	明治六年九月 十二年八ヶ月				
第三大区小九ノ区 四ツ谷簞笥町	同 同	東京府 武蔵	当使出仕 高野寛裕	明治六年九月 十三年三ヶ月				
箱館	壬申十月九日 同日		当使出仕 中山克忠	明治六年九月 十三年七ヶ月				
第三大区五小区 牛込南町三番地	壬申九月十八日 同九月十九日	東京府 武蔵	大越漠洋	明治六年九月 十四年一ヶ月				
第三大区小四区 元飯田町壱丁目	壬申八月十八日 同九月十九日	浜松県 武蔵	開拓使出仕 加地昌二	明治六年九月 十一年六ヶ月				
第三大区六小区 牛込改代町伝久寺前	同 同	東京府 渡島	租税寮出仕 渡辺敬忠	明治六年九月 十一年三ヶ月				
下谷練塀小路四拾六番地	壬申九月廿四日 同日	静岡県 武蔵	名村元度	名村沢女	「六年五月二十三日退校」			
箱館 第一ノ一小区	壬申十月九日 同日	北海道 商人	平民 丸山藤兵衛	丸山政女	明治六年九月 九年十一ヶ月			
第二大区小三ノ区 芝浜松町二十五番地	壬申九月十八日 同十月十九日	佐賀県 武蔵	開拓使出仕 万象悴 福島徳太郎	福島照女	明治六年九月 十六年四ヶ月			

第五大区小三ノ区下谷和泉橋通青石横丁大洲加藤門	第二大区小二ノ区愛宕下田村町林正十郎邸内	第四大区小三ノ区小石川中留阪	第三大区小一ノ区麹町一丁目軍医寮内	第三大区小九区市ヶ谷片町	第三大区小四ノ区富士見町四丁目北村勝吉方	第二大区小七ノ区芝森元町二丁目	第五大区小二ノ区下谷三味線堀松前従五位邸内	第二大区小二ノ区愛宕下佐久間町松平容大邸内
同 同	同 同	同 同	壬申九月十八日 同十月十九日	同 同	同 同	同 同	同 同	同 同
								「六年九月二十八日被差許」
静岡県 武蔵	静岡県 武蔵	東京府 武蔵	静岡県 武蔵	東京府 武蔵	印旛県 下総	佐賀県 肥前	東京府 武蔵	青森県 武蔵
父士族 広瀬秀雄	開拓使出仕 荒井郁之助	開拓使出仕 水野義郎	軍医寮出仕 三浦煥	開拓使出仕 三須元好	開拓使等外附属 平田景行	開拓使出仕 吉村高種	鈴木熊六	山田貞助
広瀬常女	荒井常女	水野民女	三浦都ゞ女	三須登志女	平田登勢女	吉村清女	鈴木亮女	山田直女
明治六年九月 十六年四ヶ月	明治六年九月 十五年七ヶ月	明治六年九月 十六年六ヶ月	明治六年九月 十四年四ヶ月	明治六年九月 十五年十	明治六年九月 十四年七ヶ月	明治六年九月 九年十一ヶ月	明治六年九月 十一年七ヶ月	

第二大区小二ノ区 愛宕下田村丁 林正十郎邸内	余市移住		余市移住	白石村住人	第三大区小五ノ区 牛込山伏町 伊丹保正方	箱館 第三ノ五小区		箱館詰
壬申 八月十八日 同 九月十九日		同 同	同 同	壬申 十月九日 同 日	壬申 八月十八日 同 九月十九日	同 同	同 同	明治五年 十月九日 同 日
新治県 武蔵	青森県	札幌 詰	青森県	開拓使 貫属	静岡県 武蔵		同	箱館詰
開拓使出仕 椿尚賢	中山治右衛門	開拓使出仕 宗川茂友	古沢幸三郎	菅野宣民	親則養父 大木清次郎	願乗寺法恵	同等外附属 松川直亮	当使出仕 斎藤英俊
椿淑女	中山伊代女	宗川松女	古沢稲女	菅野岩代女	大木錦女	願乗寺登祢女	松川安女	神尾春女
明治六年九月 十五年五ヶ月	明治六年九月 十四年五ヶ月	明治六年九月 十六年	明治六年九月 十五年十ヶ月	明治六年九月 十四年十ヶ月	明治六年九月 十二年二ヶ月	明治六年九月 十二年九ヶ月	明治六年九月 十三年二ヶ月	明治六年九月 十三年

第三大区小五ノ区 永田丁二丁目五番地所	第五大区小三区 下谷美倉橋佐久間町 斎藤屋源二郎方	余市移住	余市移住	白石住			
同 同 九月廿日	壬申 八月十八日 同 九月十九日	壬申 十月九日 同	壬申 十月九日 同	同 同	同 同	六年 七月一日 同	六年 七月二日 同 五日
「六年五月十日 依願退校」							
佐賀県 肥前	浜松県 武蔵	青森県	青森県	開拓使	札幌詰	鹿児島県 薩摩	
出納大属 吉武功成	寺沢正明	岩田助三郎	上田又作	羽部篤行	開拓使御用掛 国吉篤明	当使出仕 調所広丈	熊ヶ谷県平民 藤井三郎
吉武梅女	寺沢嬌粛女	岩田美恵女	上田辰女	羽部艶女	国吉基女	調所岩女	今村止幾女
	明治六年九月 十二年五ヶ月	明治六年九月 十二年四ヶ月	明治六年九月 十一年七ヶ月	明治六年九月 十二年九ヶ月	明治六年九月 九年二ヶ月	明治六年九月 十一年九ヶ月	

明治六年八月三十一日入校	第一区唐津門沢町士族斎藤忠二郎	新井田津宇	明治六年九月	十一年四ヶ月		
同上	第三区蔵士族下国弓男	古田美由女	明治六年九月	十二年三ヶ月		
同上	小西弥蔵	斎藤だい女	明治六年九月	九年四ヶ月		
同上	小西弥蔵	斎藤栄女	明治六年九月	十三年二ヶ月		
同上	第三区蔵町平民井上新左衛門	田中波女	明治六年九月	十一年四ヶ月		
明治六年九月六日入校	札幌平民御用掛金沢克忠	金沢貞女	明治六年九月	十二年三ヶ月		
明治七年二月一日入校	開拓使管下平民相良正勝	相良龍女	明治七年一月	八年十ヶ月		

〔注〕 表中朱筆によるものは「 」で示した。

〔農〇二〇―二〕

八六　内藤誠太郎より開拓使留学生願出に付問合

無号

米国在留内藤誠太郎ヨリ別紙之通依頼申越情実可憐次第ニ候得共当使派出留学生処分之儀夫々伺中未御指令モ無之場合ニ付新員増加等之事拙者之力ニ及ひ兼候条可然御見込モ有之候ハヽ何様ニか御工夫之処及御依頼候也

明治六年十月四日　　黒田清隆

森有礼殿

〔別紙一〕

至極恐入候得共別紙願之筋急速御周旋伏而奉祈候如何ナレバ文部省ヨリ帰朝之命有之時ハ自力を以今暫く之間留学仕覚悟ニ而当休暇中既ニ当学校之畑ニ而仕事を見出シ此往之学費金を用意之為め働申候次第之訳故旁御憐察を以何卒宜敷様御配慮之上何分之御答奉企望候

敬白

内藤誠太郎

黒田様閣下

〔別紙二〕

西暦一千八百七十三年八月五日

米国マサチユセツアモスト　　内藤誠太郎

マサチユセツ大農学校留学生

御存之通リ私義森少弁務使之僕従トシテ当国ニ来リ其後森氏之許可を以英学修行致シ候而昨年秋当大学校之試験を経テ本科ニ入級致シ然後官費留学生奉命仕今日ニ至ル迄精神を凝シ修業罷在候処豈計哉今般文部省ヨリ帰朝之命相下候由誠以驚歎之至ニ候未ダ詳ナル達シ無之候故更ニ其故を不存候得共不日判然帰朝之命至ルハ無疑候折角是迄勉強仕既ニ当大学校之初等之学科を学済致シ当夏試験済之上第三等級ニ昇級仕候ニ付今ヨリ三ケ年之後当大農学校ニ於テ教ユル処之学科悉ク研窮致シ他日帰朝之後我学びタル所を以尽力報国致度候処不計モ今日帰朝仕候而ハ万事泡沫ニ属シ第一国之為第二身之為実ニ悲歎之至リニ候嘗テ承知仕候ニ北海道開拓使盛大ニ其業を被建日進ミ月運ひ就而ハ此業ニ長ジタル人を御登用ノミナラズ海外留学生迄御仕送リ相成此往キ益拓地殖民ニ御手を付ラレ候と奉遙察候ヨリシテ至極恐入候得共拙者此迄農学拓地ニ志シ当大学校ニ入校仕候間此段御洞察及ビ幸ニシテ森弁務使モ在朝ニ付御聞正シ之上拙者義を開拓使外国留学生之中ニ被加候様偏ニ奉願上候然時ハ卒業之上ハ早速帰朝仕北海道開拓之為ニ我及ぶ丈ケ尽力仕度候間何卒此段御許容奉希上候謹言

黒田開拓次官閣下

付一　右に付回答

開拓次官黒田清隆殿　　森　有礼

米国在留内藤誠太郎開拓使派出之留学生願立之一条ニ付僕之見込可申進旨本月四日付を以て御懸合之趣委曲承知いたし御使御入費多端之折柄申進兼候得共同人性質才能等ニ至而者僕飽迄存知性質ハ「厚直」才能ハ「秀常」但シ非常鋭敏と者申シがたし勉力ハ甚強ナリゆへ尓成業者間違ナシと存候平生之専念農学ニアリて既ニ三ケ年程米国マサチユセツト州大農学校ニ入リ当今第三等ニ上リ居今二ケ年も経候得者成業ニ至るへく此学校ニおひてハ学術現業を主トいたし生徒を引立米国内数百之学校中尓て高名之学校ナリ湯地野村之両氏能ク存知有之候右之次第候ゆへ可相成者今二ケ年或ハ三ケ年間毎年七八百金之学資を給セられ成業候後ハ七ケ年或者十ケ年間開拓使之御用可相勤旨之約束を為さしめ候様御取計相成候得者当人之幸ひ者申尓及ハす御使之方ニおひて御得分別而多ク彼是御国益可相成儀疑ナク存候右御紙面之趣ニ応シ恭答如此

明治六年十月十日

付二　内藤誠太郎留学学資に付問合

十ノ第七十八号

米国在留内藤誠太郎当使管轄生徒願立一条ニ付過日及御懇談候処委曲御答之趣致承知候右ハ当時マサチユセツト州大農学校へ寄留致居候趣就而者学費一ケ年七百金ニテ同校ニ於テ修行差支無之候哉一応及御問合候至急御回答有之度候也

六年十月十四日　　黒田清隆

森有礼殿

〔道〇五七四一〕

八七　文部省伺北海道学事着手の儀下問に付答議

第九拾三号

文部省伺北海道学事着手ノ儀御下問ニ付答議

北海道学事着手ノ儀文部省伺ノ趣熟議致候処彼地開拓創業已来逐年人民繁殖ニ及候得共皆移住ノ人民各処へ土着各山野ノ業ヲ営ミ居其生計ノ道モ未タ十分ニ相立不申過半ハ官ノ扶助ヲ仰キ候者ニ有之当使民政ニ於テハ専ラ其産業督励ヲ主トシ未タ他府県同様学務施行ノ場合ニ至リ不申尤函館ニ中小学其他有珠与市二郡ヲ始各所ニ郷黌ノ設有之漸次学制ニ依循可致見込ニ候得共現今悉其成規ヲ蹈候テハ実地差支ノ廉不少且本庁并当出張所学校ノ儀ハ兼テ申上置候通農工等ノ現術ヲ教習シ自ラ別途ニ属シ候儀ニ有之因テ管内教育ノ事ハ一般施行スヘキノ時ニ至リ同省へ協議処分候様致度此段上陳仕候也

明治六年十二月三日　　開拓次官黒田清隆

右大臣岩倉具視殿

〔朱書〕「北海道一般ヘ学制施行之節ハ総テ文部省ヘ協議ノ上可取計事

明治六年十二月廿二日」印（右大臣岩倉具視印）

〔道一〇七一二〕

八八　仮学校大試験賞与品に付伺

次官花押（黒田）　㊞（調所）学校㊞（森）㊞（柳田）㊞

五等出仕㊞（西村）　㊞（内海）会計課㊞（桑山）㊞

七等出仕㊞（安田）㊞（時任）

当歳末男生徒大試験済之上賞典取行候分凡別紙之通見積申候依テ右物品数前広用意仕置申度若其時ニ当リ増減等有之候ハヽ、夫々取計可申此段相伺申候也

六年十二月十一日

〔別紙一〕

上等上	銀時計鎖付	壱箇	壱人ニ付二品宛
当校出板英和辞書		壱冊	
上等下	銀時計鎖付	壱箇宛	
中等上	西洋蝙蝠傘	壱本	壱人ニ付二品
西洋図引道具		壱組	
中等下	西洋蝙蝠傘	壱本宛	
下等上	褒賞	壱枚宛	壱人ニ付二品
	フラネルシバン	壱枚宛	
下等下	フラネルシバン	壱枚宛	

右歳末大試験ニ付生徒ヘ褒賞トシテ被下置候品右之通確定仕度此段相伺候也

六年十二月　　教授掛㊞（山田昌邦）㊞（下山）㊞

校長㊞（調所）

〔別紙二〕

大凡見込

上等上分	七人分位	上等下分	四人分位	中等上	七人分位
中等下	七人分位	下等上	七人分位	下等下	十人分

〔農〇一一〕

八九　女学校教師に付黒田次官とオランダ領事ホートウィンとの対話

明治六年十二月十七日教師館応接所ニ於テ黒田次官和蘭領事ホートヰン」ト対話ノ略

㊟去十五日御面会被成度旨御申越之処右書翰取扱候者失念致居遂ニ回答遅刻相成甚タ遺憾ニ候且先般御申越之折ハ我政府之繁用中ニテ

当庁へモ出頭相成兼居候場合乍不本意毎々御断申入候今日ハ緩々御話可相伺ト存候

㊎ツワーテル」ノ儀ニ付兼テ山内君マテ申入置候通明年ハ縁組為致度候処跡教師ノ儀ハ別ニ御雇入ノ御思召ニ可有之哉

ツワーテル縁付タル上ハ「デロイトル」一人ニテハ間ニ合申間敷依テハ米国ヨリ雇入可申哉ノ内評モ有之尤モ当校ハ英語ヲ専ト致候故米人ノ方可然存候得共他国ノ人ヲ入込テハ居合如何ノ考モ有之依テハ「ツワーテル縁付タル上モ毎日幾時間トカ取極メ通ヒニ教授致呉候ハヽ都合モ宜シカルヘクトモ考居候

御思召ノ程ハ至極御尤ニ候得共ツワーテル縁付タル上ハ夫々家事ノ取扱モ可有之何レ同人ノ心中相尋タル上可申上ト存候

御尤ノ事ニ候得共前ニ申述候通真之英語ヲ企望スル上ハ米人ヲ雇フハ至当ニ候得共他国ノ人ヲ加ヘ万一葛藤ヲ生シ候等ノ障害ヲ比較スル時ハ矢張ツワーテル」ヲ頼置候方都合宜ク候当使ニテモ数名ノ教師ヲ雇ヒ居リ候処同国ニテモ宗旨ノ違タル人ヲ一処ニ置候得ハ彼是苦情ヲ申立甚タ困居候

至極御尤ニ候英語ノ為ニハ米人ノ宜キト申ハ御尤ニ候得共テロイトル」モ敢テ米人ニ劣リタル訳ニモ有之間敷且又此校ハ来年又ハ明後年マテモ其表ニ建テ置レヘキ哉可相成ハ御思召ノ程内々相伺度候

当校ハ素リ北海道ノ為ニ設ケタレハ到底彼地へ引移スヘキ筈ナレトモ夫々学校築造等ノ順序モアリ来年中ニハ迚モ引移シガタカルヘクト存候

其折ハ女生徒モ教師モ御移シ可相成哉

素ヨリ教師モ生徒モ引移ス筈ナレトモ「ツワーテル」縁付タル上ハ引移ス事ハ相成間敷候得共成ルヘキ丈ハ左様致度候

此校ハ教授モ能ク行届キ生徒モ殊ノ外速ニ進歩候趣伝聞仕候処如何ニ候哉

全ク御談之通ニ候女学校ニテハ我国ノ第一等ニ候

閣下之御心労御察申上候且又拙者ニ於テモ大慶之至存候夫ニ付一応相願申度儀有之「ツワーテル」ハ縁付タル上北海道マテハ参兼可申且尊意之通他国人ヲ加ヘ候テハ宜シカル間敷依テハ「テロイトル」ノ友人ヲ招キ被相雇候テハ如何可有之哉縦令英語ハ米人ノ如キ出来不申モ他ノ学問ハ必ス優等ノ者ニ候間御利益ニ可有之ト存候

何レ此儀ハ熟議ノ上書面ニテ御依頼致スヘク候

ツワーテル縁付外宅スル上ハ「テロイトル一人ニテ諸入費モ相閊〔ママ〕ミ難渋ノ趣モ有之候間御雇ノ儀御託シ相成候ハヽ何分尽力可仕ト存候

ツワーテル」通ナリトモ跡教師ノ来ルマテ教授之差支ナキ様致度候

必ス御差支無之様可仕尤モ跡教師之来ルマテハ一寸モ動サヽル様可致候間跡御雇入之儀至急ニ御取極被成下度候

其事タニ取極リタル上ハ即答致候テモ宜ク候得共何レ書面之方間違ナシニテ宜ク候間両三日中御回答可仕候且此校ヲ設タル所以ハ北海道ノ人民元来ノ風習ヨロシカラサルノミナラス内地ヨリ移住ノ婦女多クハ娼芸妓ノ類ニテ更ニ婦道ヲ守ラサル故出生ノ子供モ必ス賢良ナルヲ得ス故ニ此校ニテ仕立タル女生徒ヲ以テ北海ノ人民ヲ開化ノ域ニ導キタキ企ニテ政府ヲ之ニ同意シ専ラ今日ノ施行ニ相成候間此上ニモ正実ナル教師ヲ企望致シ且ツワーテル等ハ生徒モ大ニ懇ニ相成リタレハ今更手放候ハ誠ニ惜ムヘキ場合ニ候

至極御尤ニテ人民ノ賢否ハ実ニ父母之教育ニ因リ候儀ニテ北海道ノ御急務ニ候得共中々年月ヲ要シ一方ナラサル御心労ニ御坐候

此校ニアル生徒カ児子ヲ産ミ其子供カ成長シタル上ナラテハ効験相顕レ申間敷候

次ニ些少ノ事ナレトモ女教師ノ申聞ナレハ相願申候学校ノ内西ノ方ノ坐敷内薄キ板ノ上ニ帆木綿ヲ敷キタル儘ナレハ中々寒ク膝ヨリ下ハ冷徹ニ耐ヘサル趣ニテ女教師ヘハ私ヨリ熊ノ皮ヲ送リ申候然ルニ生徒モ不便ニ候間日本ノ畳ニテモ御敷キ被下度候

其係ノ者ヘ可申付候

且又木羽屋敷ノ処有之昨夜ノ火事ニモ心痛罷在候趣是又可然御取計被成下度候

前同様可申付候

了リテ鉱物等ヲ展覧セリ

〔道〇五七四二〕

九〇　大試験末式次第

明治六年十二月廿四日三番講堂ニ於テ大試験末之式ヲ行フ左ノ如シ

次官殿始平服ノ事

但校長独小礼服着ノ事

第一　午前第八時五十分生徒一同三番講堂ニ整列

第二　午前第八時五十分校長及教員三番講堂ノ椅ニ着ク

第三　午前第九時次官殿始奏任官校ニ入ル校長教員及級長迎テ正面ノ椅ニ着カシム此時一同立礼

第四　次ニ各生徒学業ヲ初ム其目左ニ

綴字　二級共

作文　二級共

筆跡　一級
　　二級

訳　二級

論理　長沢猪三郎　浜辺暢美　山本盛実　伊東一隆

数学　西山正吾
漢学　嶋田純一

第五　右業終テ校長生徒学業之賞ヲ行フ
第六　次ニ校長教員及ヒ級長次官殿ノ前ニ進ミ礼ヲ諫〔陳カ〕フ
第七　次ニ次官殿始退去校長教員及ヒ級長其席ヲ送ル
第八　次ニ教員及ヒ級長校長ノ前ニ進ミ礼ヲ諫〔陳カ〕フ
第十〔ママ〕　次ニ校長教員席ヲ去ル級長送ルコト前ノ如シ
第十一　次ニ生徒一同列ヲ正シ席ヲ去リ各其舎ニ着ク
以上
但当使官員之内御用之都合ニ依リ試験之席ニ臨ミ度者ハ勝手タル可キ事

六年十二月廿二日

〔農〇〇七〕

九一　開拓使派遣海外留学生帰朝すべき旨達

開拓使

先般陸海軍生徒ヲ除ノ外各庁ヨリ差遣ノ海外留学生一般於文部省管理ノ儀相達候処其後縷々陳述ノ趣モ有之一応無拠相聞ヘ候得共其使差遣ノ生徒而已別途ノ処分難相成候条兼テ相達置候通渾テ同省ニ於テ管理セシメ猶詮議ノ次第モ有之各庁ヨリ差遣ノ分共一般帰朝可申付旨別紙ノ通同省ヘ相達候条此旨可相心得事
但帰朝旅費ノ儀ハ文部省ヘ可送致事

明治六年十二月廿五日　太政大臣三条実美

〔別紙〕

文部省

其省管理海外留学生徒詮議之次第有之悉皆帰朝申付候条於其省夫々処分可致此旨相達候事
但従前各庁より差遣之分帰朝旅費之儀ハ該庁ヨリ請取送達可取計就而ハ本件当人ヘ相達候上六十日以内ニ必出発可致若右期限相後レ候者ヘハ旅費不賜候条此旨モ兼而通達可致尤自費ヲ以テ滞留願出候者ハ不在此限候事

明治六年十二月廿五日　太政大臣三条実美

〔道一〇六九五〕

九二　開拓使派遣女子留学生帰朝に及ばざる旨達

開拓使

海外留学生徒詮議ノ次第有之悉皆帰朝申付候旨文部省ヘ相達候処左ノ女生徒ノ儀ハ追テ相達候迄不及帰朝候条此旨相達候事

明治六年十二月廿五日　太政大臣三条実美

永井繁女　津田梅女　山川捨松女

九三　医学校廃止に付掛合

〔道一〇六九五〕

札ノ第拾三号

松本大判官殿　　安田定則
外壱名　　外一名

先般其表医学校廃校之儀及御商議候処十二月三日附ヲ以御回答之趣致承知候然ルニ右及御商議候旨趣ハ同校之儀規則モ十分ニ無之由付テハ生徒学業ノ進歩無覚束尤医道ハ人命ニ関係シ其至重ナルハ論ヲ不待固ヨリ完備ノ材ヲ不得候而者実用ニ難供次第ニ有之畢竟同校ノ設ハ有名無実ニ属スヘキニ付当使ニテハ医学相廃シ医生入用ノ節ハ他方より撰挙可然併今後同校之弊習ヲ一洗シ其実挙ルトキハ生員之多少ニ不拘縦令ヒ四五人ナリトモ尚教育施行可致因テ右等之処実地之御見込承知致度儀ニ有之決シテ御入費上ヨリ起見候儀ニハ無之候間今一応御熟議有之度旨次官殿被申聞候此段更ニ及御掛合候也

明治六年十二月廿七日

追而御書面末段学校ノ廃興御詞令ハ本使長官ヨリ御渡云々正ニ致承知候也

〔道〇五五五五〕

九四　開拓使官園例則（綱領、官費生徒取扱定則、官費生徒規則、証書案）（六年カ）

開拓使農業課例則

開拓使官園例則

綱領

衣食ハ民生一日モ不可欠モノニシテ其方法技術日々ニ之ヲ講明シ其精微ヲ究メサル可カラズ故ニ本使既ニ学校ヲ建テ、農工鉱ノ諸学科ヲ教ヘ又官園ヲ設ケ和洋各種ノ牛馬羊豚蔬卉類ヲ養蓄シ教師ヲ海外ニ招キ生徒ヲシテ専ラ実地ニ就キ現術ヲ学ハシム術精シク業成ルニ及ンテハ漸次之ヲ北海道ニ移シ益之ヲ拡充シテ以テ榛莽未開ノ地ヲ墾闢シ将サニ全道人民ヲシテ凡百ノ需他邦ノ資ヲ仰カザラシメントス苟モ此業ニ従事スル者宜ク其意ヲ体認シ勉励刻苦以テ開拓ノ盛業ヲ賛クヘシ今例則ヲ設クル左ノ如シ

官費生徒取扱定則

第一条

生徒ハ十五歳以上ノ者ヲ択ヒ身体ヲ検査シ然ル後入園ヲ許シ牧畜耕植農具器械等ノ数科ヲ分チ実地ニ就テ之ヲ学ハシムル事

第二条

農業課官員ノ中特ニ生徒取締ヲ置キ其勤惰ヲ監視スル事

第三条
生徒課業ノ細目ハ課長幷取締時々雇入教師ト商議シ之ヲ指揮スル事
第四条
成業ハ大抵五箇年ヲ以テ定限トス然レトモ其業ノ練熟スル者ハ定限ニ満タサルモ之ヲ選用スヘキ事
第五条
生徒成業ノ後五箇年ハ開拓ノ業ニ従事セシムル事
但従事年限中ト雖トモ自費ヲ以テ目的ヲ定メ方法ヲ立テ北海道ニ土着シ開墾ノ業ヲ営セント欲スル者ハ正確ナル引受人ノ証書ヲ出サシメ之ヲ許スベシ然レトモ懶惰ニシテ成功ナキ時ハ再ヒ公務ニ就カシメ自業年月ヲ除キ前後月数ヲ通計シ定限ニ充タシムル事
第六条
生徒ハ其業ノ精粗勤惰ニ因テ等級ヲ改定スル事
第七条
課業時間ハ日ノ長短ニ因テ掲示スル事
第八条
生徒疾病アレハ医薬ヲ給与スル事
第九条
生徒入園ノ節ハ本人引受人連署ノ証書ヲ差出サシム可キ事

官費生徒規則

第一条
定則ヲ守リ課業ヲ勉励シ課長取締及教師ノ指揮ニ背ク可ラサル事
第二条
課業ノ時限ヲ愆ル可ラサル事
第三条
課業中許可ヲ経ス猥リニ其場所ヲ離ル可ラサル事
第四条
居室内ハ務メテ清潔ヲ要シ衣服器具ヲ狼藉シ障壁ニ戯書ス可ラサル事
第五条
定式休暇並浴湯ノ外他出ヲ許サス尤他出ノ節ハ門限ニ後ル可ラサル事
第六条
凡テ教師ノ差図業務緊要ノ件ハ之ヲ筆記シ取締ヘ差出ス可キ事
第七条
疾病アル時ハ取締ヘ届出医員ノ診察ヲ受ク可キ事
第八条
父母ノ看病ハ其情実ニヨリ差許スト雖トモ親戚ヨリ医師ノ容体書ヲ添ヘ其管轄府県ノ添書ヲ以テ可願出事
第九条

毎月四回式日ヲ定メ農業緊要ノ事務ヲ教師ニ質問講習スヘキ事

第十条

入園ノ節ハ雛形通リノ証書可差出事

右之条々堅可相守者也

明治六年十一月　　開拓次官黒田清隆

証書案

今般農業現術修行被仰付候ニ付左之通御請仕候

一　園中之御規則堅ク相守可申事

一　御法禁ヲ犯シ候歟又ハ園内ノ御規則ニ背キ候等ノ儀ニテ退園被仰付候節ハ修行中ノ給料本人或ハ請人ヨリ速ニ上納可仕事

一　成業ノ後ハ五ヶ年御使ニ従事可仕事

一　修行又ハ従事期限中仮令大病差起候トモ又ハ何様ノ事故有之候共退去ノ儀決テ願出申間敷事

右之条々聊違背仕間敷依テ証書如件

何県貫属士族平民
誰何ノ子或ハ厄介
当人何之誰印

明治何年何月
何十年何ケ月

何県貫属士民
請人何之誰印

開拓次官黒田清隆殿

〔朱書〕
「奥書」

前書之通相違無之事

年号月日

何府県印

〔道〇五七五六〕